

第36回日本分子生物学会・年会企画 アンケート 集計結果

ポジション別：大学・研究所等の研究者(教授)

回答者数：223名

ポジションと研究分野に関する設問

回答者数: 223名

質問1. あなたのポジションは？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1 学部学生	0	0.0%						
回答2 大学院生	0	0.0%						
回答3 ポスドク	0	0.0%						
回答4 大学・研究所等の研究者(助教、助手)	0	0.0%						
回答5 大学・研究所等の研究者(講師、准教授)	0	0.0%						
回答6 大学・研究所等の研究者(教授)	223	100.0%						
回答7 企業研究者	0	0.0%						
回答8 その他	0	0.0%						
合計	223							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問2. 専門とされている研究分野についてお聞きます。＜複数回答可＞

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1 生物系	131	46.3%						
回答2 農学系	25	8.8%						
回答3 医歯薬系	112	39.6%						
回答4 理工系	11	3.9%						
回答5 情報系	4	1.4%						
回答6 その他	0	0.0%						
合計	283							

※割合は合計を母数にして算出しています

第1部 研究倫理と不正についての一般的な設問

回答者数：223名

質問3. ライフサイエンスにおいて、研究不正は大きな問題だと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	187	83.9%						
回答2	ある程度そう思う	33	14.8%						
回答3	あまりそう思わない	2	0.9%						
回答4	そう思わない	1	0.4%						
回答5	わからない	0	0.0%						
	合計	223							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問4. ライフサイエンスにおいて、研究不正は極めて稀なケースだと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	17	7.6%						
回答2	ある程度そう思う	75	33.6%						
回答3	あまりそう思わない	70	31.4%						
回答4	そう思わない	54	24.2%						
回答5	わからない	7	3.1%						
	合計	223							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問5. 研究不正を目撃などしたことがありますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	所属する研究室内で実際に目撃、経験したことがある	19	8.5%						
回答2	所属する研究室内で噂があった	8	3.6%						
回答3	近傍の研究室内からそのような噂を聞いた	91	40.8%						
回答4	具体的には聞いたことがない	96	43.0%						
回答5	回答なし	9	4.0%						
	合計	223							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問6. 研究不正は日本のライフサイエンスの現状や将来の進展に悪影響があると考えますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	そう思う	161	72.2%						
回答2	おおむねそう思う	45	20.2%						
回答3	あまりそう思わない	17	7.6%						
回答4	そう思わない	0	0.0%						
回答5	わからない	0	0.0%						
	合計	223							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問7. 研究不正に対しては日本の現行システムは十分に対応できると思いますか？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 十分対応できる	2	0.9%							
回答2 ある程度対応できる	56	25.1%							
回答3 あまり対応できない	85	38.1%							
回答4 対応できない	71	31.8%							
回答5 わからない	9	4.0%							
合計	223								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問8. 研究不正に対する当該研究機関による調査、報告は適当であると思いますか？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 適当である	18	8.1%							
回答2 おおむね適当である	86	38.6%							
回答3 あまり適当ではない	74	33.2%							
回答4 適当ではない	41	18.4%							
回答5 わからない	4	1.8%							
合計	223								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問9. 研究不正の調査はどのような機関が対応すればいいと考えますか？ <複数回答可>

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 当該機関(大学、研究所など)	95	29.0%							
回答2 研究費の出資機関(文部科学省など)	48	14.6%							
回答3 第三者の中立機関	161	49.1%							
回答4 その他	21	6.4%							
回答5 わからない	3	0.9%							
合計	328								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 そう思う	68	30.5%							
回答2 おおむねそう思う	82	36.8%							
回答3 あまりそう思わない	46	20.6%							
回答4 そう思わない	10	4.5%							
回答5 わからない	17	7.6%							
合計	223								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 そう思う	33	14.8%							
回答2 ある程度そう思う	71	31.8%							
回答3 あまりそう思わない	69	30.9%							
回答4 そう思わない	42	18.8%							
回答5 わからない	8	3.6%							
合計	223								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 十分だった	2	0.9%							
回答2 おおむね十分だった	73	32.9%							
回答3 あまり十分でなかった	79	35.6%							
回答4 十分でなかった	49	22.1%							
回答5 わからない	19	8.6%							
合計	222								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 個人の問題	163	48.9%							
回答2 構造の問題	140	42.0%							
回答3 その他	30	9.0%							
合計	333								

※割合は合計を母数にして算出しています

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
回答1 教育	162	53.1%							
回答2 厳罰化	87	28.5%							
回答3 その他	56	18.4%							
合計	305								

※割合は合計を母数にして算出しています

第2部 科学論文不正疑惑についての本学会の対応と年会ワークショップに関する設問

回答者数：223名

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	十分だった	11	5.0%						
回答2	おおむね十分だった	66	29.7%						
回答3	あまり十分でなかった	44	19.8%						
回答4	十分でなかった	37	16.7%						
回答5	わからない	64	28.8%						
	合計	222							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	やるべきである	82	36.9%						
回答2	ある程度はやるべきである	92	41.4%						
回答3	あまりやるべきでない	19	8.6%						
回答4	やるべきでない	12	5.4%						
回答5	わからない	17	7.7%						
	合計	222							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	若手の倫理教育	109	21.3%						
回答2	PIの倫理教育	117	22.9%						
回答3	研究不正の背景	158	30.9%						
回答4	研究不正への対応策	105	20.5%						
回答5	その他	22	4.3%						
	合計	511							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

	項目	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
回答1	学会の責任者	7	3.2%						
回答2	不正があった研究機関の調査関係者(責任者)	119	53.6%						
回答3	トップジャーナルの編集者	44	19.8%						
回答4	研究費助成機関	15	6.8%						
回答5	その他	37	16.7%						
	合計	222							

※割合は合計を母数にして算出しています

質問1. あなたのポジションは？

回答者 番号	その他記述
	記述なし

質問2. 専門とされている研究分野についてお聞きます。〈複数回答可〉

回答者 番号	その他記述
	記述なし

質問9. 研究不正の調査はどのような機関が対応すればいいと考えますか? <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	1、2、3では駄目。それぞれのエキスパート集団が必要。どこにも利益相反のない専門の中立機関が必要。
※	利害関係がなく、かつ研究内容をわかっている人によるものによらないと難しいと思う。また、あくまでも再発防止(航空事故調査会9のようなものが妥当だと思う。
※	本来は出資機関と思うが、役人の天下り先が増えるだけ。しかも、彼らの調査の妥当性は保証されない。
※	研究データがどこに所属するかに依存するので、第一義的には当該研究期間に調査権限があるのは当然である。他方、採択された論文に疑義が生じた場合、その雑誌が学会誌である場合には、掲載した責任として当該の学会にも調査する、もしくは、正式調査を発議する権限があるとすべきである。
※	当該機関の調査委員会に外部委員を加える。
※	当該機関が担当すべきであるが、調査委員会すら立ち上げない大学もあるので、第三者に委ねるしか方法はないのでは。
※	そのような調査専門機関を設立する
※	当事者が所属した学会
※	学会
※	学会
※	最初の調査は当然当該機関が行うべきでしょう。しかし、何らかの外部中立機関に、告発のあったことや調査の進捗状況を報告する義務を付けるべきだと考えます。例えば昨年話題になった〇〇大学の案件など、関係者が多いので調査に時間がかかっているのだとは思いますが、このままやむやみにしてしまうのではないかと、という疑念があることも確かです。
※	3. 学会も調査を担当すべき部分がある。4. 問題の論文が出版された学術雑誌。
※	当該分野を複数名含む中立的な立場のメンバーからなる委員会
※	不正事例に依る。
※	日本版ORI
※	基本的には当該機関しか無いと思うが、可能なら外部から第三者の中立者をメンバーに加えるのが好ましい。
※	当該機関の自浄力が育つことが重要だと思う。日ごろの研究の進め方に関するレビューも必要だろう。研究費の配分に関する公正さも重要で、特定機関や花形研究だけでなく、研究のすそ野を広げるための研究投資を一貫して行うことが、不正の土壌を枯らすだろう。
※	競争相手と当該機関。
※	場合によっては警察(詐欺罪)

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	同一組織内での調査では、ことに対象者が幹部級の場合に手心加わる可能性がある。また、組織ごとに調査範囲が異なる可能性もあるため、同一基準での調査を実施する第三者調査機関の設置が必要である。
※	そう思う	日本の場合は、権力関係や嫉妬における告発も多いことから、いたずらに告発を間に受けて、告発された人だけが被害をこうむることのないようなシステムを構築する必要がある。告発者が匿名で、調査だけが進むような事態は避けなければならない。故意による告発が増えることを危惧しますが、しっかりした制度を整えば、ORIは必要だと思えます。
※	そう思う	不正を犯した研究者の当該研究機関が調査したのでは公平性の担保が心もとない。
※	そう思う	当該機関でもよいのだが、客観性等の観点から外部中立機関が望ましい
※	そう思う	調査はほとんどの場合、当該研究機関の内外の、不正の疑惑がかけられた人間と無関係の専門家が選択され行う羽目になる。彼らは自分の貴重な時間、能力を奪われているのであり、しかも、責任感が大きければ大きいほど真摯に取り組む。日本の科学にとって大きなマイナスである。第三者機関が告発、調査を担当できればそれがベストだろうし、また、行き場の無いポストク、特任ポスト助教の就職先にもなるのではないか。彼らは血眼で不正を探すだろう。
※	そう思う	組織内での調査では、内部の政治的な理由で報告がゆがめられる可能性がある。また、研究費の出資機関は多岐に涉っており、それらがそれぞれに不正の検証部署を持つことは、大きな無駄を生む為、望ましく無い。従って、外部中立機関の設置が望ましいと思う。
※	そう思う	文科省や大学当局による調査では、マスコミ情報等に左右されて正確な調査が行われない可能性がある。
※	そう思う	ある研究者(複数)が明らかな捏造をして、学会で調査機関を立ち上げた。その意見をまとめて、大学側に事実を伝えた。大学側は、お情け程度に調査委員会を立ち上げたが、結局、不正した研究者は何ら処分も受けずに、現在に至っている。この大学は総長も捏造疑いで、雑誌ネイチャーからも批判されており、不正問題に対して、きわめて曖昧な態度を取っている。なので、外部中立機関の設置は妥当であると思う。
※	そう思う	可能なら第三者中立機関が設置されるべきだと思う。
※	そう思う	現状、日本に中立機関は存在しておらず、国際的にも研究公平性において後進国といえる。これを国際標準に引き上げるには、ORIのような組織は必要。
※	そう思う	当該研究機関が調査しても限界があり、公平な調査ができるとは思えない。
※	そう思う	不正が疑われた場合にも多くの場合大学は当該教室に関連せずしかも当該の分野の専門科である人員は十分に存在しない。学会が法的は裏付けを持てるのかも問題があり、多くの学会や研究者が協力して、法律の専門家などを交えて第三者機関を作ることが必要と思われる。
※	そう思う	本来は当該機関が行うべきと思うが、それができない機関がある。出資機関が知らないふりをしている現状には大いに問題もある。不正を行う大きな動機がある以上、今後もいくらかでも発生する事が容易に想像できる。従って、第三者機関を作らざるを得ない。
※	そう思う	Primaryな調査機関である必要はないが、前項でコメントしたように、関係部局が適切に調査をしていることを監査する機関が必要です。
※	そう思う	必ずしも内部自浄作用が働くとは限らない。現行の方法だと学内の担当教員がすべてボランティアで行っているが、責任を負って判断する立場に立つ以上、調査にもそれなりの報酬が支払われるべきであると思う。
※	そう思う	調査を他の研究者のボランティアに頼ると、今回のように調査が大幅に遅れ、その調査を担当した研究者にも多大な負担がかかるため。
※	そう思う	告発で明らかになった研究不正疑惑が明らかになると組織を含む利害関係者に負担が多かれ少なかれかかるので、早く終結させようとし、告発者は守られないことがある。その上、利害関係者による調査には操作が入る。
※	そう思う	公正な取り締まりを行うために、中立であることが必要と思えます。
※	そう思う	当該機関だと当事者なので徹底的な調査は不可能。
※	そう思う	ORIのような外部機関の設置が望ましいが、日本社会でそれが十分に機能することは期待できない。天下りの機関が増えて税金の無駄使い先が増えるだけになってしまうだろう。
※	そう思う	ねつ造にまで至らなくても、2重投稿の防止にもなる。
※	そう思う	このような取り締まり業務は科学出版や報道の関係者を含めて、一般社会全体で対処しなければ解決しない。個々の不正事例に対する調査報告や、学会などによる自浄作用では根本的問題は解決しない。研究不正に対する罰則を明確にし、研究者にはその社会的責任や倫理的な行動規範について教育研修を義務づけるべきである。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	当該大学では公正な調査は難しいと思います。第三者といっても当該大学が指名した委員では意味がありませんから。
※	そう思う	なれ合いを回避するために必要な措置であるから。
※	おおむねそう思う	当該機関が行う調査には限界があるのではないか。
※	おおむねそう思う	外部中立機関はない方が望ましいが、大学内での自浄作用を期待できないので、仕方がないと思う。
※	おおむねそう思う	Q9にも書いたが、利害関係がなく、かつ研究内容をわかっている人によるものによらないと難しいと思う。また、あくまでも再発防止(航空事故調査会9のようなものが妥当だと思う。それから、捏造そのものの根絶は難しいと思う。やる人は一定の割合で必ず出ると思います。
※	おおむねそう思う	現状では、該当機関の不正を行っていない研究者の負担が大きすぎる。
※	おおむねそう思う	研究不正を取り締まるのには、大学や文部科学省ではない中立的な(文部科学省の天下りでもない)気アくんが必要である。
※	おおむねそう思う	ただ、調査のための調査機関(形式だけの調査)であってはならない
※	おおむねそう思う	文科省の出先機関となるのであれば、余り意味がない。完全に独立した機関にすべきと考える。
※	おおむねそう思う	あまり大げさな組織を作っても意味がないし、むしろ研究を阻害する効果しかない。大学内の権力闘争の道具として使われる恐れさえある。
※	おおむねそう思う	利害関係のない機関の方が機能すると思うから。ただ、大学や研究機関を取り巻く環境が異なるので、全て米国通りというわけには行かないと思う。
※	おおむねそう思う	コストが問題になりますね。
※	おおむねそう思う	内部機関では上記地位者から簡単に揉み消されるから、
※	おおむねそう思う	当該研究機関だけだと十分でない可能性もあり、第三者機関による調査も必要と考えられるが、その中立性・専門性から考えて外部中立機関の設置が望まれる。
※	おおむねそう思う	但し、構成員に学外の専門家も入れる必要がある。
※	おおむねそう思う	大学あるいは研究所自身に自浄能力があるのかは、疑わしい。第三者機関による調査が望ましい。
※	おおむねそう思う	中立な第三者によるチェックが望ましいと思うが、日本の場合は本当に「中立な第三者」がいるのか不明。研究者の社会は結構狭く、何かしらの関係性がある場合が多いのではないか。
※	おおむねそう思う	大学ごとに調査の公表や処分などが基準がまちまちであり、透明性に欠ける
※	おおむねそう思う	その機関の資金をどこから捻出するのか、継続した仕事があるのかが、問題になる。
※	おおむねそう思う	本来はないにこしたことがない、設置するのであれば日本の風土を考慮して設置する必要がある。
※	おおむねそう思う	ORI的な機関はあったほうがよいと思う。ただ、基本的にNIHの予算に限定されているところは限界がある。日本のシステムに適したORIとはどのようなものか、具体的にはまだよく分からないが、模索してよいと思う(遅すぎなくらい)。
※	おおむねそう思う	日本の研究者コミュニティとして自浄作用を発揮する機関があると良いのではないのでしょうか。論文や研究費の審査と同様の、匿名でピアレビューで審査するような方法で。
※	あまりそう思わない	アメリカに比べ研究者コミュニティが小さく狭い日本では、「本当に中立な専門家」を探すことが多くのケースで不可能ではないか？アメリカではなく、もっと小さな国(例えばイギリスやスイス)の制度がどうなっているのか知りたい。
※	あまりそう思わない	現在の法制度の中では中立機関が研究機関の内部事情を詳細に調査する権限を持つとは思えない。
※	あまりそう思わない	中立機関の中立性は、どう担保されるのでしょうか？研究を実際にしていない人たちが調査したら、冤罪も頻発してしまうかもしれません。
※	あまりそう思わない	官僚の力が強くなるだけだから。
※	あまりそう思わない	将来的にそうした機関の設置の要求が高まる可能性は否定しないが、そのような外部中立機関の構築には適切な人材が必要で、そのような(高い見識を持ちうる研究歴が有り、かつ、実験データを直接扱う勘所を持つ)人材が、科学全体をカバーできるほどすぐ集まるとは思えない。アメリカの場合は、学位を持つ研究関連の人材が、非常に広い分野(研究機関や企業のR&D部署、特許関連部門だけではなく、政権の科学政策決定組織や、実際の科学技術系企業の経営トップ等)で流動的に活動しているため、ORI等の機関をスムーズに設置・解体出来る。しかし、現在の日本の人材分布や流動性からすると、目的の機能を果たす機関に人材を流すのが難しい。
※	あまりそう思わない	日本で可能な組織の規模的に正しく機能するとは思われない。むしろ既存の組織が自浄能力を発揮する形の方が良いのではないか。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまりそう思わない	根本は、サイエンスに対する謙虚な姿勢を持つことが重要である。サイエンスは点数とりの手段ではない。取り締まり機関を設ければある程度の抑制には繋がるかもしれないが、本質的な解決にはならない。
※	あまりそう思わない	それ自体が役人の天下り先となったり、制度が煩雑になって研究に障害となったり、その機関自体が腐敗の温床となるであろうから
※	あまりそう思わない	事実無根の嫌疑がかけられたとき、研究が止められてしまうため。
※	あまりそう思わない	実データにもっとも接する事のできる(雇用者)にまず調査を求める事が基本。しかし研究費を受け取った機関や、雇用者などが調査にあたるのは利益相反関係があり十分な調査が行われる保証がない。出資機関や中立な専門家の第三者機関(学会)がその結果を精査し、問題があれば追加の報告を求めるべき。ORIはその一つの形ではあるが、このような調査専門機関の弊害も予想されるので、関係者がORIに頼らない自浄作用を示す事がまず必要である。
※	あまりそう思わない	取り締まることで不正が無くなるとは思えない。そんなことをして人生何が楽しいのか。不正者は自然に淘汰される。
※	あまりそう思わない	誰がどのように運営するかによります。
※	あまりそう思わない	専門性を必要とする一方で、現役ばりばりの方は、そのような機関に所属することは無いでしょう。とすると、自分の研究が頭打ちになったような、「2流」研究者が担当することになり、十分な調査、判断が出来るとは思えない。まして、定年後の方など、そういう名目でいつまでも「業界」をウロウロされても良いことはありません。
※	あまりそう思わない	研究は公の基金を元に行なっているので個人の良心に基づく部分が多く、取り締まりは合わないのでは。研究者を育てる過程で、不正はいかに他人に迷惑を掛けるかをしっかり教育することが大事かと思う。
※	あまりそう思わない	中立ということは現実には困難で、それを口実に研究機関にたいする非学問的な干渉が起こる可能性がある。また調査に当たっては、研究機関側の防衛意識が高くなり、かえって事実を隠す力も働く。研究機関の研究倫理感が高まることが根本で、そのための政策的工夫が求められる。
※	あまりそう思わない	研究者の良心を信じたいです。
※	あまりそう思わない	第三者中立機関が妥当だが、(後ろ向きな事象について)膨大な時間や費用を要すると思われるため個人的には推奨はできない。ORIが拡大する基礎生物や基礎医学研究の監視にどこまで機能しているか？も疑問。
※	あまりそう思わない	まず、ORIの業務等についてお知らせいただかないと判断が出来ません。ORIがどのような役割を果たしているかわからないので、適切な回答をしてはわかりませんが、法律上の犯罪ではないし、調査自体は、所属機関でないと出来ないのでは、研究者への指導や処罰については国の方針に基づき、所属機関で判断せざるを得ない。
※	あまりそう思わない	コストがかかるのではないかと。
※	あまりそう思わない	外部機関が取り締まる風土が日本に根付いていないので、不正を見逃さないために研究者のすべてを監視するような体制になりがちであるから。
※	あまりそう思わない	自浄機能を各機関が備えておくべきと考えます。米国の場合でも、各研究機関が調査を行っているのではないのでしょうか？ORIから調査を命じられる、というシステムなのではないか？
※	あまりそう思わない	不正な研究で得たデータは、いずれ淘汰される(社会的に消える)と思うから。厳しく取り締まるとチャレンジする精神がなくなってしまう。
※	そう思わない	研究者自らが身を正すことが重要。取り締まり機関を作ると言うのは不正があることを前提にしている好ましくないし、情けない。
※	そう思わない	日本の文化とアメリカの文化は異なるので、何でもアメリカのものを持ち込めばよいという発想がおかしい。
※	そう思わない	アメリカのように人的金銭的なサポートが乏しく、第三者といっても別の大学の教員を動員することになり、大学教員へのしわ寄せが増えるだけである。
※	そう思わない	そこまで多いとはおもわない。。存続のために不必要に調査などが増えることを危惧する。
※	そう思わない	研究機関と学会が自主的に対応できない場合は、やむを得ない。しかしその場合、研究者の活動に制約が課せられることになるだろう(現状では不要な書類が多々必要とされるだろう。これにより研究時間などがより制約される)。
※	わからない	研究不正を取り締まるのは良いが、そのために数多くのまっとうに研究を行っている研究者の負担が増大するようならば、本末転倒になる可能性がある。
※	わからない	日本は、結局責任をはっきりさせない社会構造、意識があるために、このような組織を作っても、期待されたほどの機能は発揮できないと思われる。
※	わからない	日本の現行システムは必ずしも他国の成功例の導入を成功に導かない。科研費制度以外の公的資金の無駄な非競争的配分(厚労、農水、経産の一部資金)も言うなれば成果を生まない研究への資金の垂れ流しという点では研究不正と同罪であり、これらも含めた意識改革があるか否かに依る。

質問10. 研究不正を取り締まる外部中立機関の設置が望ましいと思いますか？

回答者 番号	回答	選んだ理由
※	わからない	そのような機関が存在することは、とても望ましいことであると思う。しかし一方で、日本の場合、それが管轄省庁等の天下り先になってしまったりするという問題や、需要に対して機関の維持・管理のコストの問題、適切な判断を下すことのできる人材の不在の問題など、現実的には、期待するほど機能するとは思えない部分もあると思う。そのため、わからないとしました。
※	わからない	どの程度の実効性を期待できるのか見積もることができない。
※	わからない	アメリカのORIについての詳細を知らないので、このような機関が日本において有効に機能するのか否かの判断が難しい。

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思う	当該の不正が学会誌に掲載されていた場合、学会は主体的に取り組むべきである。過去の例でも、某学会が、研究者の不正に関してその所属機関に調査の発議をした例もあり、こうした活動が出来る人材は学会と言うくくりでは集まるはずである。また、学会が年会を通じて、研究内容の公表の場を設けている関係上、学会誌を刊行しない学会においても、同様に対応する義務はあると思われる。ただし、こうした主体的な動きが意味をもつためには、学会自身が法的にどのような立場であるか等も影響する。日本全体で学会の持つべき責任は何かという議論をして、全て学会が役割を明確にすべきである。
※	そう思う	不正を疑われている研究室、研究者が日本分子生物学会の運営上重要ポジションや賞などの対象になっていたり、不正防止に関わるシンポジウム・討論・広報に関わっていることに対する道義的・社会的責任や、学会組織設立の本来の目的に鑑みて積極的な関与がないのはおかしいのではないだろうか。また、分子生物学会は他の中小の学会員も重複して加入している。このような立場から、学会間の交流等を通じて積極的に取り組んでも良いのではないだろうか
※	そう思う	上記理由のように、大学機関はあてにはなりませんから、当然でしょう。せめて学会側での調査、事実なら脱会を勧告もありだと思います。
※	そう思う	各分野で不正は潜在的に隠れていても存在すると思いますが、「バンドの世界」の解析が多い分子生物学では、左右反転やら縮小拡大やら、お絵描きソフトでデータを改ざんすることは容易いです。学会の会員が何かをするには大反対ですが、中立な立場を保てる状況ならば、調査などに関わるべきと思います。
※	そう思う	できる範囲で調査することには、研究者が社会的に認められるため重要な意味がある。
※	そう思う	当然である。権限を有していないとコメントする事自体に、現在の分子生物学会の体質を感じる。学会はまず分子生物学会への社会的な信頼が失われたことを認識すべきである。その上でその回復の為に自身が何をなすべきかを考えるべきである。なにより、調査権限の有無にかかわらず、可能な範囲で調査を行なう努力をばらうべきではないか。これまでの学会の対応には全く失望している。なぜ今、このタイミングでこのようなアンケート調査を行うのか。それも理解に苦しむ。なぜもっと早い段階で行動を起こせなかったのか。一刻も早く、学会として、社会に対して発信すべきである。
※	そう思う	専門性の高い第三者機関として投稿論文の正当性を科学的に再評価する能力と責任がある。疑義が提出されているGenes to Cellsの論文に関しては編集部が保有している資料に基づいて問題点を整理し、著者に確認を求めるべき。また満足のいく説明が得られない場合、Editorからのeditorial expression of concernとして読者に対して問題点の所在を明確にすべき。
※	そう思う	学会発表のレベル維持に関しては、学会にも相当の責任があると思うから。
※	そう思う	所属会員が、学会において不正な内容の発表をしたり、また不正な論文で受賞したりすることに対しては、その学会としての責任を取らないといけなと思います。
※	そう思う	調査権限がなくても、不正を指摘される物証(論文など)について自由に討論する場を年会のプログラムに取上げるくらいの活動ができるのなら、やる価値はあるかも知れない。
※	そう思う	ねつ造か等の判断には専門性が必要なので、専門家集団である学会が関与することは必要だと思う。
※	そう思う	不正を検証するのは研究分野が近い研究者が適任だから。学会全体で研究モラルについて意識を深めて自由に意見交換することが不正防止の基本だと考える。
※	そう思う	研究における不正はまじめに研究に取り組んでいる若い研究者に無駄な時間や労力をかけることになりすし、真理の探究の妨げになります。特に分子生物学会には生物系では最先端の研究をしている若い研究者が多くいます。生物系をリードする本学会が積極的に不正撲滅に取り組むべきだと思います。
※	そう思う	専門家の精査が必須であるから。
※	そう思う	〇大等のねつ造事件をみてもとても自浄効果があるとは思えないので、力のある学会などの関与も重要。
※	ある程度そう思う	学会は、研究費・報償・企画などで、事実上一部の研究者のハク付けに寄与している。これらを選考、決定する際に用いられた業績がねつ造などの不正に基づいているものであれば、当然その分の責任をとり、資金等の回収や名誉剥奪を行うべきである。
※	ある程度そう思う	多忙な研究者が多いため、現実にするのはなかなか困難だと思います。
※	ある程度そう思う	官僚指導よりは、研究者指導の方が良いと思う。
※	ある程度そう思う	学会として、責任を取るべきだと思う。これまでもそのように対応しようとしてきたので。
※	ある程度そう思う	調査に加わると言うより、公的な組織として告発を積極的に行うべきである
※	ある程度そう思う	但し、調査委員の中立性が問われる

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	ある程度そう思う	研究不正は研究者自らが正すべき問題であり、学会こそが研究者の集団として良心を実現する集団であるから。
※	ある程度そう思う	当該機関よりは、外部に位置しているのでよいのではないか。
※	ある程度そう思う	関わっても構わないが、公正にすべてを明らかにできるとは思わない。それはこれまでの歴史が示している。ソサイアティー外の利害関係のないものが担当する必要がある。仮に公正に調査されたとしても、今のメンバー、団体が内輪で調査を行った結果に対する信用が全くない。
※	ある程度そう思う	専門的な知識の必要性の観点から、関連学会が第三者中立機関と連携し、必要な場合は意見の提出や調査メンバーに加わる体制があるのよいのではないかとと思われる。
※	ある程度そう思う	分子生物学会での発表、シンポジウム招待講演、グラント申請の推薦等を行っている場合は、学会としての責任がある。
※	ある程度そう思う	学会による制裁も検討してよいのではないか。
※	ある程度そう思う	学会が積極的に調査した方がよいと思うが、では誰が調査するのかとなるとQ10の様に中立性を保った研究者を確保するのは困難だと思う。
※	ある程度そう思う	分子生物学会年会や、機関誌で不正データが発表された場合に限り、調査する意味があると思う。
※	ある程度そう思う	高度に専門的な事項に関しては、ORIからの諮問に対し、調査に協力することはいいことだと思う。
※	ある程度そう思う	外部機関による調査が必要だと考えられた場合、調査員の推薦などは学会がやるべきだと思います。ただ、いわゆる「大物」の先生の手が必ずしもきれいなのかどうか・・・
※	ある程度そう思う	日本には中立の機関が存在せず、しかも当事者である大学が不十分な対応しかしていない現状を学会として放置するべきではないと考えます。調査権限を有していなくても、公表されたデータに不正の疑い(コピペ)があることを学会としてリストアップして公表したり、ジャーナルに通告するなどは(誰でも)できるはずですよ。どうして、今すぐにやれることをやらないのでしょうか？
※	ある程度そう思う	調査機関立上げの基礎を築くべきである。
※	ある程度そう思う	単独学会で対応するのではなく、各学会の連携のもとに社会的警鐘を鳴らすべきと思う。
※	ある程度そう思う	少なくとも当該機関の調査や報告についての評価のようなものを述べることは有用だと思う。
※	ある程度そう思う	調査の法的裏付けがない。不正調査で多忙になりすぎる恐れ有。
※	ある程度そう思う	少なくとも学会誌(分生の場合はGene to Cell)を発行している学会は、発行した論文の査読を行っているの、自身が発行した雑誌の範囲で不正がありそうなら調査すべきではないでしょうか。
※	ある程度そう思う	学会は大勢の関連分野研究者が集まる場で、不正を見抜きやすい面がある。
※	ある程度そう思う	今回、直接の引き金になった方が所属しておられたのが分子生物学会年会の機会に、「研究不正」等を無くすための企画等をオーガナイズあるいは講演しておられた事実は、極めて重く思います。
※	ある程度そう思う	研究成果を発表し、研究交流の場である学会は、学会の活動について公正性を明確に示すべきである。研究不正が是正されないで済まされるような、不正の温床のように見える学会は社会的な存在基盤がなくなり、淘汰されてしまう。
※	ある程度そう思う	もちろん学会としてできる最大の努力はすべきと思う。ただし、学会が調査権限を持つにいたるプロセスと合理性がよくイメージできない。逆に聞きたいが、生物科学連合のスケールで意思統一していこうという流れはあるのだろうか。
※	ある程度そう思う	調査機関の立ち上げを準備し推進するとよいのではないのでしょうか。
※	ある程度そう思う	日本分子生物学会の会員のなかから中立公正な調査者を提供できると考えられる。
※	あまりそう思わない	学会は調査機関からの要請に応じて、専門の見地からの意見を述べるだけでよいと考える。
※	あまりそう思わない	不正そのものを調査するのではなく、不正が生じた背景について研究者(学会員)の立場を理解できるかどうかは検討する意味があるように思う。擁護せよというのではないが、学会が学会員を調査・糾弾するのではなく、同じ研究者として何があったのか、どうしてそうなったのかを知って共有できることは共有して善処を考えるというのが前向きな対応ではないかと思う。
※	あまりそう思わない	学会は調査よりもシンポジウム等により学会員の意識向上を促すとともに、成果評価の在り方についての提言等をとりまとめて関係機関に対して提議することが本来の役割である。
※	あまりそう思わない	学会では限界があると思うので。
※	あまりそう思わない	そんな気の重い仕事をして下さる方が学会にいらっしゃるのでしょうか？

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまりそう思わない	防止のための啓蒙には努めるべきだと考えるが、調査は、研究そのものを生業としない第三者機関にゆだねるべきだと思う。
※	あまりそう思わない	学会はあくまで前向きであって欲しい。ただ、分子生物学会規模の巨大な学会が提言を行う事は有効だと思う。
※	あまりそう思わない	専門の機関が調査すべきであり、学会自体が調査権を持つ必要性はない。しかし、不正の行われた仕事の内容(真偽)に対してコメントは積極的に言うべきであると思う。
※	あまりそう思わない	現状調査権なく、どのように調査権を付与するのか、見えません。
※	あまりそう思わない	果たして、中立的な立場で調査できるのか、疑問である。
※	あまりそう思わない	その分野を理解できる専門家は必要と思われるが、要請に応じて協力する体制を作っておけばよい。
※	あまりそう思わない	分生は大きい、小さくて力のない学会も多いため。
※	あまりそう思わない	例え学会関係者が調査権を持ったとしても、公平に行使できるとは思えない。
※	あまりそう思わない	学会なら上記の機能を持たせることも可能だと思うが、専任スタッフが居るわけでもなく、兼任の仕事が増えるのは望ましくないと思う。
※	あまりそう思わない	意見、と。そうならない対策を立て実行するのみ。
※	十分でなかった	無理、かつ不適
※	あまりそう思わない	中立性が保たれない。多かれ少なかれ、conflict of interestが発生するため。
※	あまりそう思わない	生データにアクセスできる権限を有するなら可能
※	あまりそう思わない	調査は学会の設立主旨にはあまりそぐわないと思います。
※	あまりそう思わない	研究成果に対する科学的なレビューが学会の基本だと思う。下手をすると関連がなくても連座しているとして、学会から不当にネグレクトされる人たちも出てくるだろう。大学院生などの研究批判力や自立性を高めるための環境作りなどが、学会が主として行うべきことだと思う。
※	あまりそう思わない	教育は行うべきだが、調査は筋違いのように思う。
※	そう思わない	このような調査は同業者が関わることは避けなければいけないので、関わるべきではない。
※	そう思わない	学会が何を目的として存続しているのかを考えたほうがよいと思います。また、学会にはそれを行う権利があるのか、極めて疑問です。Q9で不正が告発などで明らかになった場合、不正が明らかになったのですからさらに調査するのでしょうか？
※	そう思わない	学会の調査では第三者とはいえない。
※	そう思わない	学会には責任はありません。学会員の貴重な時間を奪ってはいけません。
※	そう思わない	学会が調査に加わるとすると、学会活動を活発にやっている方が中心になると思われるが、活発にやっている方自身が不正を行っている疑惑が生じる過去の事例から鑑み、むしろ学会とは関係ない機関が調査やるべきだと思う。不正を隠して論文を重ねることで、学会の中心人物になる方が生じる現状があるから。
※	そう思わない	学会は、不正が明らかになった時点で、その人物を排除するシステムを持つれば十分だと思います。基本、学会は性善説をとって、自由に議論を進めることができる雰囲気を持つことが重要と思っています。学会が不正の調査を行い出すと、自由に議論する雰囲気が損なわれると思います。
※	そう思わない	手弁当での調査になれば、限界がある。
※	そう思わない	再発防止に重点を置いた調査であれば非常に有効に機能すると思う。例えば航空機事故調のように、そこで全てを明らかにしても、匿名性と守秘義務で守られるのであれば、大学院生など立場の弱い当事者から真実をひきだせるのではないかな。
※	そう思わない	学術発表に専念した方がよい。
※	そう思わない	不正はしないようにしようといった、シンポを総会などで組織しながら、実際に不正があっても何らの行動も起こさないのは、無責任きわまりない。
※	そう思わない	学会会員の本文は、最先端の研究成果を出すことにある。低レベルな研究者につきあう必要はない。
※	そう思わない	学会はGenes to Cellsに関する案件を除き直接調査をするべきではないでしょう。もちろん、不正の可能性を当該機関に連絡するとか、啓蒙活動とかは積極的に言うべきです。
※	そう思わない	学会にそこまでの人的リソースはないし、権限もない。一般論としての意見を発信することは重要だが、調査は所属機関に一任すべき。
※	そう思わない	そうする権限も能力もない。
※	そう思わない	学会の調査で不正が明らかになったら除名され、この分野で研究費等を獲得できなくなるくらいのペナルティーを課することができるなら関わって
※	そう思わない	ORIのようなものが立ち上がるまで、会員の事例で研究の社会に影響力が大きなケースに対して行えば問題はないと思います。ネットの書き込みが不正を発見し新聞が社会に問題提起しているのに頼り、研究者の集団が何もしないというのはお粗末と言ってしまうのではないかな。

質問11. 関連学会が、研究不正の調査に関わる方が望ましいと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	そう思わない	学会は不正の「調査」に関わるのは不適切だと思います。学会のオフィシャル・ジャーナルは、もし掲載された論文に不正があれば、それを著者に問い正すことがあっても良いと考えます。
※	そう思わない	現実的に、学会が調査を行う事は困難であると思います。
※	そう思わない	担当の方の時間をもったいないです。
※	そう思わない	個人的には、学会が行うべきことでは無い。勿論、学会が行う若手研究者への啓発活動は賛成。
※	そう思わない	大学等研究者は基本的に不正を行っておらず、調査については完全に中立的立場で行われ、信頼できるので、その結果を受けて学会が判断すればよい。
※	そう思わない	学会が発行している雑誌については、責任をもって調査する必要があると思う。それ以外は、研究者の所属機関あるいは公的機関が行えばよいと考える。
※	そう思わない	各機関の責任と考えます。
※	そう思わない	学会では第三者機関になりえないから。
※	わからない	結局、所属機関が行うのと大差ないのでは？研究者が属する研究社会の意識が大きく影響するのでは。以前RNA関連で不正が追求されたのは、RNA研究者の研究に対する意識が高かったからと思われる。
※	わからない	この設問をする分子生物学会のスタンス自体が大きな誤りです。学会が関わったものには対抗措置はあるでしょう。学会員あるいは学会役員の背信あるいは背任（定款第3条の目的に賛同して同第6条の規程に基づき正会員となった者が当然負うべき義務違反）を何ら問う権利がないというのですか？学会HPのトップページに学会誌として位置づけられた雑誌への捏造疑惑論文への同論文に限った調査権限も無いというのですか？このアンケートの設問を作った執行部の意識はそんなものですか？。ばからしくて以降の回答をやめます。とって送信ボタンを押したら受理してくれなかったので全部1と回答します、以降は無視して下さい。
※	わからない	学会が対応する意義はどこにあるのでしょうか？調査担当員の推薦等でしょうか？制度的に整った中で、学会として対応することは問題ないと思いますが、調査員への正当な報酬や責任の所在などの制度はどこが作るのでしょうか？

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	おおむね十分だった	大学にもよるが、論文不正は懲戒免職の対象にもなっている。
※	おおむね十分だった	現行の制度ではこれ以上は無理だったのではないか。対応に当たった人を責めることは不可能ではないか。
※	おおむね十分だった	調査結果の説明がなされているから。
※	おおむね十分だった	本人が否定し続けた場合にとるべき対応(解雇するかなど)の判断が難しく、外部からわかりにくいケースがあった。
※	おおむね十分だった	公開されている最終報告書を見ると、非常に良く調べてあり、徹底的に洗い出している。一方、〇〇医大の初期の対応は言語道断だろう。心証として、医学部は対応が悪いようにも思われる。
※	おおむね十分だった	不正をした研究者は大なり小なりに社会的な制裁を受けていると感じる。
※	おおむね十分だった	多くはきちんとやってきたと考えたい。しかし、あきらかに不十分と思われる例もあり、それが全体の信頼を失わせる大きな要因となりかねない。その意味で、当該機関にすべて任せるのはこのまじいとは思わない。
※	おおむね十分だった	自分の研究科で起きた捏造の処理は、ある程度満足できるレベルだったと思うが、それを外から見ると、違ったように見えてくると思う。
※	おおむね十分だった	不正が公表された結果、報道などで大きく広まり、不正を行った研究者がポジションを失うなどの社会的制裁も受けているため。
※	おおむね十分だった	他人の「虚偽の」研究の調査など、特殊能力を要するようには思います。つまり、該当する人が隠そうとしたら、それを見抜くのは至難の業ではないでしょうか。世の中に存在する一般的な不正を暴くために、警察や検察(ないし税務署)があるのですから、研究の不正を暴くためには、そういう専門の人が必要です。現状では、おおむね十分だと思います。
※	おおむね十分だった	多くの場合で職を失っている。
※	おおむね十分だった	今までは明確なルールや前例はなかったし、機関も無限の権限を持っているわけではない。そのような状況では最大限のことがなされたと思う。
※	おおむね十分だった	恐らくは国や関連機関との調整などで時間的に遅い点の問題ではあるが、それ以外は校正に行われていると判断している。調査期間を短縮すべき改善点はある。
※	おおむね十分だった	基本的には研究不正が明らかなのに、処遇等がうやむやになるようなことはなかったと思う。
※	おおむね十分だった	不正は個人や個別の研究室の問題だと思いますので、研究機関に責任を押し付けても時間と労力が無駄になるだけかもしれません。
※	おおむね十分だった	ただし、時間がかかるのは問題だと思います。また、調査開始時点でなんらかの公式発表(開始について)があるべきだと考えます。当然、匿名化などにより被疑者の権利などは尊重するのが当然ですが。
※	おおむね十分だった	研究機関の教員・研究者にとって調査をすることは本来の仕事ではないので、迷惑である。これまでの対応が不十分であったとしても、それ以上やれとは言えない。本来、その道で見識をもった中立的な人を専任として、調査をするべきである。研究者は、参考意見を述べるだけでよい。
※	あまり十分でなかった	某大学での不正事件の調査結果がいまだに明らかにされていない。
※	あまり十分でなかった	実働部隊の人が切られるだけだったり、PIは責任を取って辞任したが、実際に捏造した人は、「PIに言われたやった」、「自分はしていない」など、責任を取らない例が多すぎる。
※	あまり十分でなかった	十分ではないけれど、そのことで研究機関を批難しようとは思わない。
※	あまり十分でなかった	どうみても単純ミスとは思えないものでも、correctionで済まされた場合、所属機関はまったく調査しない。完全に問題になったケースでも、調査しているのかどうか不明な場合がある
※	あまり十分でなかった	退職を認めた後、十分な調査を行わない場合があるから。
※	あまり十分でなかった	責任著者な責任をとるという意味もあるのに、研究不正論文の責任著者が責任を取っているケースは多くないから
※	あまり十分でなかった	ケースバイケースだと思います。〇〇大の元総長のケースは、対応が非常に拙い例でしょうし、分子生物学会関連では、明らかになった時点で中心人物が退職したことにより調査が行き届かなかったと考えられるケースだと思います。
※	あまり十分でなかった	あまり十分でなかったケースがあったことは見聞きしています。
※	あまり十分でなかった	十分でなかったのは、現場の対応より、こうした事案を想定して誰にどれだけの調査権限と義務があるかが法的にはっきりしていなかった点であろう。私の知っている研究不正への当該研究機関の対応は遅くはあったが、チェックをされていた方々は非常な努力を払われていたと聞く。特に、実験の再現等は不正に関わらなかった研究者に不毛な作業を強いるわけだが、それもこなして最終結論を出すとなると、時間が係るのは当然である。検証は全てボランティアで行われる上、権限と義務が明確になっていないと、疑義のあるデータへのアクセスすら不可能となる。悲しいことだが、ある程度性悪説にたったシステム作りをしてゆく必要があると考えられる。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	あまり十分でなかった	〇〇教授の件では、それまでルールのほとんどないところでの状況であるにも関わらず、それなりの学内外の指針が整備された。しかしながら、昨今の不正疑惑に関する件ではそれが活かされていないかの印象を受ける。裁判対策であろうか、事態に対する透明性も低下したように感じる。
※	あまり十分でなかった	大学の研究者は、本質的にそのような業務に向いていないと思う。
※	あまり十分でなかった	〇〇大学も〇〇大学も不正者が居直って、解雇できなかった。
※	あまり十分でなかった	対応としては十分だったかもしれないが、それぞれの大学での対応に温度差があると感じられ、社会および研究教育機関全体としてみれば公平であったとは思えない。
※	あまり十分でなかった	ボスが責任辞職して終わりでは、解決にならない。
※	あまり十分でなかった	正確に言うと、分からないというのが正解かもしれない。大学が明確な調査結果を発表した例が少なすぎて、うやむやにしているという可能性を払拭できない。
※	あまり十分でなかった	多くの場合、調査報告書が開示されない事がありこのような点には不満である。しかし研究不正とその対応はあくまで個別案件であり、このようなおおよっぱな設問には答えにくい。
※	あまり十分でなかった	調査内容や結果が十分に公開されているとは思えないため。
※	あまり十分でなかった	まだまだ疑わしいと言われている研究があるので。
※	あまり十分でなかった	調査に時間がかかりすぎる。
※	あまり十分でなかった	弱者が犠牲になるケースが多いと思う。
※	あまり十分でなかった	ケースバイケースと思いますが、一般的にあまりにも長い時間がかかり過ぎているような印象があります。また、「どう考えても不正でしょ」というものが、曖昧な結論になっている事例もあるように思います。
※	あまり十分でなかった	なぜ不正に到ったかその背景の解析が不十分。
※	あまり十分でなかった	お金をたくさんとってくる研究者が一番偉いという風潮が大学などでつよまっている。学内での研究レビュー力を高める努力が必要だろう。人件費1%削減のために、講座制が維持できず、大講座制に移行しつつあるが、それも准教授以下の発言力の低下につながっていると思う。
※	あまり十分でなかった	事実関係はきちんと公開(公表)すべき。
※	あまり十分でなかった	原因や責任が不明瞭なままだったケースもあるように思う。
※	あまり十分でなかった	研究不正を招く底部の問題をきちんと解決してほしい。たとえば研究者教育とか、学生・大学院生との接し方の教育とかもしてほしい。
※	あまり十分でなかった	適性とは言えないまでも不適切な研究費の使用に対して、極めて厳しい処置が下るのを身近に見聞している。これに対して、明らかな不正使用、虚偽の研究に対して大学が発表する処断は穏当であると感じることが多い。
※	あまり十分でなかった	「研究不正」がデータのねつ造等に限定される場合は、「2. おおむね十分だった」で良いと思いますが、「研究倫理」という視点で、研究室内の運営上の問題(パワーハラスメント、セクシャルハラスメント等)までを含むと、学内(部局内)で問題の決着を図ったという事例を聞いています。
※	あまり十分でなかった	研究不正に関して責任を持って集中的に管理する機関がなく、そのため同じような事例が繰り返されている現状から見て、研究不正の是正に向けた取り組みが十分であるとは思われない。
※	あまり十分でなかった	不正は個人の問題だけではなくありません。その様な不正を許す研究体制や社会が問題です。大学をはじめ日本の研究社会全体にも責任ありという点が十分に認識されていません。
※	十分でなかった	最近の事例にしても、うやむやにされているように思います。
※	十分でなかった	大学などの研究機関で調査できる人材も時間も無いのが、現状で形式的なものに過ぎないと思います。正直に認めた者が厳罰に処され、がんとして否認(証拠も消した)した者がうやうやになるのが日本の状況だと思います。研究不正に関わった者でも、数年したら復権して責任ある立場(学長など)に就任している姿をみると嘆かわしいことです。
※	十分でなかった	大学によって対応がまちまちで、厳しく処分される者もあれば、不正をしても対して処分されない人間もいるから。
※	十分でなかった	形式調査に留まる限り、再発は防げない
※	十分でなかった	〇〇先生研究室の問題に関して、〇大や多の関連大学や研究所の調査結果や、その後どのような措置がとられたのかが不明である。
※	十分でなかった	不正の問題で、学内が紛糾している。不正をした方が身分が上の場合、うやむやになったのを見て、教官だけでなく、学生への影響を考えて、研究者という立場でなく、普通の大人として、対応してほしい。見ていて、みっともない。
※	十分でなかった	大学としては、なるべく小さな問題としたい(組織を守りたい)との考えるので、対応が不十分になるのは自然である。
※	十分でなかった	上記に述べたように、十分ではなかった。実際に捏造に加担した人間が、今でも大学人として、活動を続けているのはどうかと思う。しかも、国立大学ですから。

質問12. 研究不正に対する研究機関の対応は十分だったと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由
※	十分でなかった	実質にも対応していないと思う。
※	十分でなかった	結局のところ、処分の基準は不明確だし、再発防止にもなっていない。
※	十分でなかった	この問題に十分と言うことはあり得ない。それほどまでに根が深い。
※	十分でなかった	研究機関や学会が、できる限り綿密な調査を行なって、公式な報告をした場合は、おおむね十分と言える。特に〇〇〇〇氏の件に関しては、〇大に頼らず、分子生物学会が自主的に調査しなければならない。〇〇氏を「若手教育ワーキンググループメンバーに任命した点を重く受けとめ」という会長の言葉が本心ならば、なおさらであろう。この件に関し分子生物学会の腰が引けているのは、より大きな疑惑をまねきかねない。〇〇氏の業績からして、学会が直接調査しないのは理解しかねる。共同研究者にも自覚が必要だろう。学会は責任を持って早急に対応すべきである。
※	十分でなかった	一部の大学のみ対応。
※	十分でなかった	これまでの対応が十分であれば、次々と明らかになることは無いはずです。
※	十分でなかった	過去の〇〇大学、〇〇大学、〇〇大学の対応、全て不十分だと思います。少なくとも実行犯については、解雇のうえ、研究の世界から放逐すべきであったと思います。直接PIが関わっていなかったとしても、何らかの処罰は行うべきであると思います。
※	十分でなかった	〇〇研の件での〇大の対応は遅すぎる。
※	十分でなかった	〇〇大学医学部の〇〇教授、〇〇教授の件をはじめほとんどの研究不正事件において、大学などの調査、その公表、処分のいずれにおいても、全く不十分であった。
※	十分でなかった	処分が曖昧で終わるケースが多い。
※	十分でなかった	勤務大学においても研究不正疑惑が取りざたされたことがあるが、学内政治に関わる様々なしがらみがあって、基本的に「穏便に済ませる」方向に行くか、もしくは「これを機会に学内派閥の政争の具」としてアジテートするか、どちらかに偏りがちの印象を受けた。少なくとも、学部の圧力がなければ学内での対応は機能しないと思う。ただ、当然だが、研究機関が対応すべきではないと言っているのではなく、対応すべきだが、構造的に無理がある状況が多いということ。
※	十分でなかった	〇大等のねつ造事件をみてもとても自浄効果があるとは思えない。
※	十分でなかった	不正した理由をほとんど明らかにできていない。
※	わからない	何をもって十分であったといえるのかが不明です。不正があったとした場合、当該研究者が属する機関が対応すればそれでよいと思います。そこへ第三者の私が踏み込めるのでしょうか？
※	わからない	対応が積極的に公開されていないから、わかりません。
※	わからない	大きく問題になっているものは公開され、研究責任者もそれなりの処分を受けているが、きちんと対応されたものがすべてとは思えない。
※	わからない	機関による。しっかり対応する機関もあれば、捏造問題が複数回出ているにも関わらず、全く対応しない機関もある。
※	わからない	おおむね十分であったように思われるが、対象者処分後の状況が分からないので断言できない。
※	わからない	個々の不正例と、それらに対する研究機関の対応について、詳しく知らないから、わからない。それを知るためには、時間がかかるし、他機関のことを詳しく調べている時間もありません。真摯に研究に取り組んでいる研究者ほど、自分自身が不正をすることは考えられないし、他人が不正をすることの一つ一つ気にはしていないと思いますが、ほんの一部の不正者のおかげで、管理が厳しくなって、研究以外に裂かれる時間が増えていくことを、一番に嫌がっているように思います。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題	基本的に個人のモラルの問題でしょう。
※	個人の問題	Q4で「極めて希」の頻度をどう定義するかにもよるが、いずれにしても日本国内では多くの研究者が不正に対してクリーンに研究しているのは確かである。競争などで常に成果を出し続けなければ、研究が出来ない等の点について構造を指摘する向きもあるが、そうした圧力下でルールを守るか、守らないかはむしろ個人の責任であることを明確にしないと、逆に不正を行う[モチベーション]を抑える点についての議論がお粗末になる。
※	個人の問題	構造的問題も当然あるが、不正をしないヒトが圧倒的に多いので、結局は個人の問題。
※	個人の問題	完璧な構造など存在しない。更生を期待せず、しっかりとペナルティを与えることが必要。
※	個人の問題	何のために研究をしているのか、目的を見失っている研究者が増えていることが直接的な原因だと思いますが、そのような不正を働く気にさせているのは構造的な問題だと思います。
※	個人の問題	サイエンスに従事するものとして自然の節理を知りたいと考えているのなら、データの捏造など行うわけもない。一方、研究費の過度の集中によって、高額の研究費を獲得しているPIが『結果を出さないといけない』という過度のプレッシャーをかけることも研究室メンバーが不正を行うことになる遠因となっている可能性もある(PIの考え方、研究室の運営の仕方次第だと思います)。
※	個人の問題	研究不正は いつの時代にも存在していた。今の研究体制にその原因を押し付けるのは間違っている。もし そうでないというのなら 統計的に現在のほうが 不正が多くなっているということを 証明するべきである。非科学的な結論は科学者として許されない。
※	個人の問題	名声欲しさの悪知恵。これはポスドクや大学院生であっても同じ。
※	個人の問題	個人の人格の問題。そんなことをして人生何が楽しいのか。
※	個人の問題	最終的には個人が研究の意義を自覚しているかどうかの問題になると思う。しかし、指導者が仮説を語ることで、気が付かないうちに、研究担当者に結果を誘導していることはあり得ることであり、それが不正に繋がるということであれば、多くの指導者が少なからずリスクを負っており、積極的に不正を防止する働きかけを同時に行う必要があると思うが、そこまでの余裕が無い指導者もあり、それは構造的欠陥であると思う。
※	個人の問題	自己管理と研究室運営の欠陥に由来すると思う。まともな研究者なら成果が重大であればあるほど慎重に進めるはず。別のメンバーに追試させるとか。
※	個人の問題	初等中等教育における倫理教育の不足、画一的な大学入試制度、大学院定員増にも関わらず教員数が増えなかったことによる綿密な指導の不足、行き過ぎた競争原理、若手ポジションの不足など多数。
※	個人の問題	本来は研究者の良心により防がれるべき問題であるから。
※	個人の問題	研究は苦勞、失敗も多いが、興味を引き立てられるからやっているのであって、不正をしてまで論文を書くのは間違いだという理性が働くように教育すべきだと思います。一方で、一部の有名雑誌では、結論は明らかに正しいことが証明されているのに、査読者が明らかに無駄な実験を沢山要求する傾向があると思います。過去に問題になったケースでは、コントロールのウエスタンプロットを使いまわすなど、本質的でない部分の不正も有り、こうして事は、結論と関係ない実験を沢山要求された学生などが面倒なので同じデータを貼り付けてしまったのではないかと思ったりもします。
※	個人の問題	原因は個人にあり、その動機や頻度は様々だと考える。しかし、研究不正を検出し、正しい処分を決めるしくみが欠けている構造上の問題を、まず可及的に改善していかないと個人の動機が消えないでしょう。また、科学技術の多様化などチェックの困難さを増し続けるこの時代に、日本でチェック機関の設置など改善を試みないのであれば、永遠に対策が追いつかない状態に陥ることも危惧される。
※	個人の問題	順調にキャリアを重ねてきたPIが、思ったように成果が出ずつまずいたとき、出来心で不正を行うことがある。
※	個人の問題	中、高、大学、大学院での教育の問題だと思います。
※	構造の問題	ポスドクへの圧力、補助金配分が、基本的には過去の論文の業績に依存するため、論文をだすことが第1になっている。
※	構造の問題	研究費やポジションや任期に関する競争が過剰であり、しかも多くの場合で、研究内容そのものではなく、雑誌名やインパクトファクターなどしか審査されないに等しい。このような状況では、不正をするメリットが大きすぎる。
※	構造の問題	研究室内での閉鎖性とチェック体制の不備

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	構造の問題	「選択と集中」という文科省の政策が、業績至上主義を招き、生き残りのための意図的な研究不正につながっているように思います。また、空前の就職難です。研究のあまりできないポジションにも、業績のある研究者の応募が殺到しています。環境のよい研究機関に残りたい人の中には、わかっていて不正をしてしまう人もいることでしょう。
※	構造の問題	特定の個人に莫大な研究費が投じられ、それに見合う成果を求められることが、研究不正の一番の原因である。いくら優秀な研究者でも、年間数億円もの研究費を助成すべきではない。莫大な研究費は、多くの時限付きスタッフ(ポスドク)の雇用を必要とし、彼らの中には不正に手を染める人物も出てくる可能性があるが、一研究者が多数の人間の行動を把握することは無理がある。このような米国式の一点集中型研究費配分方式・研究者雇用形態が諸悪の根源だ。
※	構造の問題	権威主義から完全な業績主義に変わり、役人は「ネイチャー、サイエンス」しか名前をしらないという状況では、「立派な業績を出して、挽回する」という発想が強くなる研究者は出てくると思います。古き良き時代にも、いろいろな問題がありましたが、業績主義の利点を活かすことによる、トレードオフとしてデメリットが出てきてしまい、その1つが不正と感じています。
※	構造の問題	特に分子生物学の分野がそうだと思うが、単純にインパクトファクターの累積で業績を判断するケースが多い。研究の背景や目的は人それぞれなので、一番公平な評価はインパクトファクターであるという意見。これに基づき人事を行った場合、若手や中堅が点数至上主義に陥るのは、やむをえないと思われる。
※	構造の問題	研究者に余裕がなくなっている(目先の利益にとられすぎている)
※	構造の問題	「良い研究=IFの高い雑誌に掲載された研究」といった、およそ科学の根本的価値とは程遠い概念が、研究費の配分や人事を支配しているためである。また、研究世界での評価と、一般社会での評価も隔絶している場合が多々ある。その解決方法は、研究が正当に評価されるシステムを作ることであるのだが、決定的な良い方法はないだろう。ただ、若い研究者が安定して研究できる体制を作ること、少なくとも若い研究者のポジションを欲しての不正を減らすことはできるかも。
※	構造の問題	短期間の任期性と就職難
※	構造の問題	研究者が研究内容を評価できなくなっている。極端な論文至上主義(意味もなく、Natureの論文をありがたがる)。Natureなどのトップジャーナルの編集の問題、不正を平気で隠そうとする営利主義
※	構造の問題	研究の内容自体ではなく、雑誌名やインパクトファクターでしか評価されない風潮が最大要因。次の要因は、任期付きポジションが増え、また評価によって待遇の違いなどが大きくなるために、「短期間で業績を出さなければ」というプレッシャーが非常に大きいこと。
※	構造の問題	研究費申請の公正性に不備がある。
※	構造の問題	成果主義が強まっており、publication(雑誌)がきわめて重視されている。理想的には、ある程度長期的に研究成果を判断できると良いが、実際には難しい。
※	構造の問題	個人の問題もゼロというわけではないですが、どちらかというと構造の問題の方が大きいと思います。科学者の社会的待遇は、一部の人を除き、あまりよくありません。特に若い人に対して競争が厳しすぎるように思います(期限付き雇用の研究者が多い上、短期間で成果を求められているので、不正の誘惑に駆られる状況になっています)。
※	その他	科学者も人間で、多すぎるので、ある頻度で不正をする人がいておかしくないです。ゼロということは有り得ないです。個人の場合は、よいポジションを得るために不正をして論文を作成する誘惑や名誉欲のための誘惑が考えられます。研究不正は科学体制の構造的欠陥ということも言えるケースもあるとは思いますが、それを改めたら他の問題が出てくるように思います。ボスの仮説に合わせようとする誘惑が一番大きい。
※	その他	個人:どの分野でも一定の割合で不正をする人はいる。そういう人は、不正は絶対に悪いことだとは思えないと思います。構造:不正はペイしない、本来の目的からそれるということをきちんと教える機構がなく、現在は個人的な努力と一般的な倫理観からのみ行われている。
※	その他	研究においてなにが不正であるかを研究者を育てる過程でしっかり教育する必要があるのに日本の科学教育はその点を怠ってきたと思われる。明らかな不正はともかくとして論理的思考においても甚だ科学者とは思えない人が日本人研究者のなかに多く見かける。
※	その他	予算の配分の不公正が招いている。すなわち、すでに明らかにされた研究に重点的な配分が行われるために、無理な公表を望むためと思われる当座大きな成果が期待できなくとも、将来大きな成果を生み出す可能性を伸ばすための基盤的な研究への目配りなしには問題は解決できない特に、申請内容とは全く異なるテーマの業績を掲げて、予算を獲得できるようなシステム自体が間違っている

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	その他	不正への誘惑はどこにでもある。ニュートン、ガリレオ、メンデルも不正を行っていたのであり、プロモーションや予算も確かに大きな誘惑だろうが、同業者に認められたいという誘惑はいつの時代にもどこにでも、誰の心にもある。それが最初の動機だろう。それが肥大化するのには構造、個人の問題。
※	その他	全員が不正をしているとは思いませんから、個人のレベルの問題もあることはある。一方、論文を出すことへのプレッシャー、生き残れないのではないかと不安、リバイズ時の実験結果はやる前からこうならないとダメとわかっている点など、起きやすい状況はあるでしょう。
※	その他	PIからの強すぎるプレッシャーは、ねつ造を生む可能性があると思われる。背景には、不安定すぎるPIポジションの増加やグラントの寡占化による研究費獲得競争の激化があると思われるが、こちらは構造的な問題。研究者(学生、ポスドク、助教等)がねつ造するケースの一部は、本人が思っている自分と、周りの客観的な評価とのずれが大きく、虚栄心が強い場合などもあるのではないかと。これは個人の問題。
※	その他	人間の本性の中、「有名になりたい」というものは、科学の原動力の何割かを占めるものであると思います。「ノーベル賞」があれば世間でもはやされるというのも、その表れの一つであると思います。公的なお金であれば、納税者に説明責任を負う必要があるので、研究者の心理を利用して、研究費を出すところがあり、研究者は、がむしゃらに働いて気が付くと少しフライングをしていた、という場合が多いのではないかと思います。それ以外の確信犯は、心の病気の範疇に入る問題でしょう。
※	その他	だから、両方やってしまった個人的原因については、やった本人にしか分からないだろう
※	その他	研究に限らず人間のやる事に素朴な間違いと不正が一定量生じる事は当然である。不正ゼロではなく、小さな不正を見いだして正して行く恒常的なシステムが必要。
※	その他	外部資金の獲得額が、研究者としての評価ならびに大学の評価に使われる事が多く、特に大型資金を得ている研究者は、インパクトのある論文発表が求められる。また、任期付研究者が増加し、採用延長には研究成果(論文、外部資金獲得)が求められ、じっくり独自性のある研究に集中できにくい研究環境にある。
※	その他	研究費を獲得して、人を雇用しながら研究室を維持していくことは、競争的で国の目指す方向に進んでいるのかもしれませんが、研究費が途切れると、一度雇用した人を解雇しなければならないので、解雇した人の次の就職先の問題もありますから、まだまだ日本では、毎年再就職先を探しながら生活する社会にはなっていないと思います。
※	その他	個人の性格上の問題も大きいですが、常に新しい成果を迅速に出すことが求められる現在の科学体制に依るところも大きい。
※	その他	研究費が一部の研究者や経験不足の若い人に必要以上に配られるシステムが問題。
※	その他	研究不正・ねつ造を指導教官が指示している場合と、部下が行ってしまった場合とで、原因は大きく異なると思うが、部下が良かれと思いつく場合というのは対策が難しいと思う。
※	個人の問題/構造の問題/その他	1)第一は当然個人の問題である。どんな環境でも不正をしない人は絶対にしない。2)個人が誤りをしでかしてしまったときに、それを指摘し、正す為のシステムが欠落している。3)真偽には興味無く、記事になるかどうかだけに興味を持つ、極めてレベルの低い「マスコミ界」の責任も重大である。(これは科学に限らないが。)
※	個人の問題/構造の問題/その他	基本的にはなぜ泥棒という犯罪があり、根絶できていないのか、ということとまったく同じ。研究活動は、現在においては社会経済活動なので、名誉と金が入る一般的な社会活動で起こり得ることはすべて普通に起こる。以上の視点からすると、エンドでは確かに個人の問題であるに決っているが、そうした「犯罪」が起こるのは構造的な問題なのはほぼ自明。
※	個人の問題/構造の問題	不正をするのは個人。でも成果主義があまりにも激しくて個人にプレッシャーをかけているところはあとおもう。
※	個人の問題/構造の問題	倫理的な考えが欠如している個人の問題が一番大きいですが、論文の内容ではなく、どのジャーナルに掲載されたか(インパクトファクターの高いジャーナルへの掲載)で評価する風潮がある。研究費の採択審査等においても、そのような評価が行われているように思われる。
※	個人の問題/構造の問題	直接的な原因は研究者としての良心と見識のレベルになるが、根底には極端に論文成果に偏った評価制度と研究に使用される技術の高度化・専門化による論文審査の難しさが存在する。
※	個人の問題/構造の問題	研究資金獲得競争の激化が要因のひとつである。研究者の良識に依存する。
※	個人の問題/構造の問題	個人の問題が一番で、そこに所属している構造上のチェック機構がない問題も大きい。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか? <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	インパクトファクターの高い雑誌に論文を発表しようとするのは世界共通なので日本のみの構造的問題ではないが、研究不正する、しないは個人的な問題。
※	個人の問題/構造の問題	もちろん個人の問題ではあるだろう。しかし、過剰に業績が求められ、しかもそれがインパクトファクターだけで判定され、勝った者が研究費総取りよのうな現行システムでは、そのような誘惑を個人により強く惹起するだろう。
※	個人の問題/構造の問題	一義的には個人の問題。ただ、研究成果の内容ではなくどの雑誌に論文が掲載されるかによってキャリアが大きく左右されすぎているのが遠因でしょう。
※	個人の問題/構造の問題	論文数、インパクトファクター至上主義の弊害。
※	十分でなかった	個人の問題が大きいが、競争的資金を獲得できなければ研究ができないという現状は、不正を生み出しやすい状況をもたらしていると思う。
※	個人の問題/構造の問題	業績主義で研究評価が決まり、それに基づいて研究費やポストの獲得(人事)が決まるため、研究不正をしてまでも業績をあげたいという人間は、PIだけでなくスタッフや学生にいても不思議ではない。
※	個人の問題/構造の問題	基本は個人の問題であるが、競争資金の偏りなど、今の研究費の配分などにも問題があると思う。
※	個人の問題/構造の問題	個人の資質や倫理観の持ちかたの違いが、一つの原因であることは確かです。一方、現在(少なくとも旧国立大学の場合)、基盤的な研究費が殆ど組織から措置されず、競争的外部資金を獲得し続けなければ研究が続行出来ない状況となっており、競争的資金獲得のためには絶えずそこそこの研究業績が要求されます。一方、研究においては、短期間で非常に進展したあとは、次のブレークスルー迄成果がなかなか上がらない場合がままあります。このような条件でも成果が上がらないと、資金難となり研究自体の継続が出来なくなり、それを避ける為に不正に手を出してしまう人が出て来てしまうと思います。
※	個人の問題/構造の問題	いわゆるIFの高い雑誌に掲載されることで研究費が取れるシステムが続く限り問題の解決は難しいと思われます。個人的な問題としては、科学をやるのではなく、多くの研究費を集めることが目的となっている。研究不正や研究費の不正も助成金を集めることが高い評価となると機関や個人が思い込んでいるところが原因になっていると考えます。
※	個人の問題/構造の問題	過度の成果主義の推進が原因の一つ
※	個人の問題/構造の問題	私の知る例では、捏造を許す状況を歴代の個人が許容し、研究室(費)運営の構造として増強するというプロセスで引き返せないところまでになった。特に大きな社会問題になる前に、このような雰囲気は周囲には自明であったのに、それを糾弾出来ないのはなぜか。
※	個人の問題/構造の問題	個人、構造、両方だと思います。特に、最近では任期制の問題もあり、ある年限までに論文をださないと、クビになりますから、そういった大学自体の構造もあるのかもしれませんが。あと、研究者の倫理観の低下もあると思います。捏造を働いても、そして、それが公になっても本人は、大学に残れるのですから。。。
※	個人の問題/構造の問題	教員・研究者のrecruitやgrantの審査に際し、個々の研究者の評価を、単純に発表論文のIFと数でしか判断できない peer review system(構造そのものと研究者自身の能力のなさ)の問題。
※	個人の問題/構造の問題	両方があるから
※	個人の問題/構造の問題	最終的には個人の問題だとは思いますが、その背景には、Big journalに通らないと研究者人生の道が拓けないという切迫感、さらにその裏にはアカデミアポストの不足、ポストク制度の不安定性、頭脳循環の滞留などの問題があると思う。
※	個人の問題/構造の問題	いくらかは研究体制の内部構造とも関係があるかも。
※	個人の問題/構造の問題	「問題」を具体的に明らかにすることが重要。この意味でも、〇〇〇氏の件を解き明かす努力が必要。
※	個人の問題/構造の問題	個人で行って繰り返してしまう場合もあるし、不正について甘い個人研究者とそれを見て育った学生から組織だった不正を続けて多数の不正を行うようになる場合とがある。
※	個人の問題/構造の問題	研究費配分が特定個人や団体に集中し、それ以外の研究者は極端に予算が少ない。予算獲得競争が激しすぎるのが不正の原因となるかもしれない。
※	個人の問題/構造の問題	個人の問題としては、研究不正は多かれ少なかれ昔からあった問題であり、今も昔も大きく変わらない。ただし、内部告発が多くなった現状では、研究不正が明るみになりやすくなっただけではないだろうか。一方、構造の問題としては、任期付きのポジションが増えたことにより、一定期間で実績を上げる必要性が高まり、そのプレッシャーが研究不正につながるやすい状況を生み出していることはないだろうか。
※	個人の問題/構造の問題	研究者全般に競争的研究費を得なければ研究が出来ない様な、貧しい環境に置かれていて、(特に大型の)研究費を獲得するには良い成果を出さなければならないという状況が改善されないかぎり不正は根絶できないと思う。一方で、このような環境でも多くの研究者は真面目に研究に取り組んでおり、不正を行う個人の資質に問題があるのも確かだと思う。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/構造の問題	研究成果を上げないと資金が続かない、というのは、世界共通でしょう。また、一度脚光を浴びたら、その快感を忘れられないのでしょう。所属している機関の中の立場もあるでしょう。一度、大きな額の研究資金を得て仕事をしたら、研究員の給与や機械のメンテにもお金がかかるでしょう。一度、大振りし始めたら、止まらないのが研究というものかもしれません。
※	個人の問題/構造の問題	ポジション獲得等の競争が激化し、追いつめられた状況に置かれたことに起因する構造的要因も大きいと思いますが、やはり個人の資質による部分も大きいと思います。特に、大きく取り上げられている不正の事例を見ますと、「追いつめられて」というよりも「出世したいという欲望」によるケースが目立ちます。
※	個人の問題/構造の問題	良い研究とはなにかを改めて議論する必要がある。トップジャーナルに載せることと研究費獲得、その他名誉が直結しすぎている構造的問題を取り上げ、対応を議論することが必要。日本のサイエンスを伸ばすには、これまでの近視眼的な政策、評価で良かったのかどうかの検証が必要。
※	個人の問題/構造の問題	研究費が無くなると実験が出来なくなり論文が書けず研究費が入らないという悪循環に陥るので、切羽詰まった研究者の中には不正に奔るものがおおかしくは無いと(情情的には)思う。研究費が単年度の使い切りという様式になっている部分も負担が大きかったが、最近では基金化されているので良い傾向と思われる。
※	個人の問題/構造の問題	業績で人事や研究費の配分を決め過ぎ。人物やテーマをもっと見るべき。
※	個人の問題/構造の問題	構造上の問題として、若者が研究を開始する段階で徹底した不正防止や、研究不正は研究者としての犯罪行為ということをも身につけさせる徹底した教育が必要である。その上での不正は個人の問題。
※	個人の問題/構造の問題	過度な数値成果主義の評価構造が、それに過剰適応した個人を生み出し不正の原因となる。
※	個人の問題/構造の問題	現状の多くは野心の大きいボスのために、任期付きのポストクなどが捏造を強いられるという構造の様に思う。任期付きの職だと任期内に成果を上げないとステップアップできないという心理的圧力は大きい。
※	個人の問題/構造の問題	個人・構造の両方の問題。不正を行ったものに対する処分が甘過ぎるし、不正を見つけ出す体制は全く存在しないに等しい。発覚する不正は全て「ずさんな」不正だけであり、より巧妙な不正は発覚せずに終わっている。個人の資質ももちろんだが、現在の自然科学の成果の発表方法、評価方法が根本的に変わらない限り、「巧妙な不正」はなくなる。
※	個人の問題/構造の問題	生命科学系は研究費獲得のための競争が厳しく、また職を得るのも難しい。業績至上主義が不正を招くのではないか。
※	個人の問題/構造の問題	どのような制度であれ、悪意を持った個人による不正は起こりうる。ただし、競争的資金がないと研究自体できないような体制では、少しでも知名度が高い雑誌に掲載したいという誘惑は強くなる。
※	個人の問題/構造の問題	業績至上主義の必然的結末だから。
※	個人の問題/構造の問題	個人の要素がかなり強いとは思いますが、インパクトファクターが高いいわゆる「トップジャーナル」に論文が掲載された研究が良い研究で、年月を経ても揺るがないような地道な基盤的な研究(→大方は、ファンシーではないので専門領域の学術誌に掲載される)を低くみる傾向が「蔓延」している現状が、構造の問題としては看過できない所まで来ていると思います。
※	個人の問題/構造の問題	人事選考において、業績として論文のインパクトファクターの要素が重視されすぎだと思う。論文の引用数をもっと重視すべき。
※	個人の問題/構造の問題	科学者に対して適正な倫理教育が行われていないことが最大の原因と思われる。
※	個人の問題/構造の問題	基本的には個人の資質によるものですが、研究者を取り巻く環境にも問題があります。例えば、外部資金獲得及び昇格に論文業績が必要なので、不正をしなければならぬのが現状ではないでしょうか。科研費の在り方自身を考え直す必要があるかもしれません。
※	個人の問題/構造の問題	資金力のあるグループに頻発する。これは上昇志向の強さ(個人)とプレッシャー(構造)の両方が作用しているから。
※	個人の問題/構造の問題	構造的には不正をしたものが有利になってしまう状況がある。一方では、個人が不正をするかどうかは決めており、個人の問題でもある。
※	個人の問題/構造の問題	20-30年くらい前のアメリカでは、すでにポストを得ることがかなり困難だった。今も同じだと思うが、その当時、多少のいかわしいデータでもCellに論文が通り、それがばれる前に職にありつければ、次につなげることができるとさえ言われていた。この発想は、誤謬や偽造が科学の進歩を妨害することを、まったく理解していないものであり、科学の世界から排除すべきである(言うまでもないが)。もう一つある、責任著者は知らなかった、という主張があるが、これも間違いである。科学の進歩を妨害した責任と研究費(多くの場合は国費)の不正な使用に対する責任は重いので、現状よりも重い相応の責任を取るべきである。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	具体的な原因
※	個人の問題/その他	原因を知るためにこそ、各大学の調査結果を公表していただきたい。印象としては、良いジャーナルに論文を発表することに対するプレッシャーと過剰な評価が、研究者の行動をゆがめているといえなくはない。基本的には個人の問題だが、そのような考えに染まった指導者のもとで教育を受けた若手のモラル低下が心配される場所ではある。
※	個人の問題/その他	基本的には個人の問題と思うが、不正を迫られる状況(成果や業績不足への焦燥感)も原因と思われる。これを構造の問題とっていいのかわからないので、その他として状況の問題とした。普通の状況では不正に手を染めることがないような人でも、場合によっては少し都合の悪いデータは出したくないという意識はあるのではないかと？切羽詰まった状況ではその意識が過度になることもあり得そうである。
※	個人の問題/その他	業績至上主義。現在の基礎医学では膨大な実験(時間)が必要とされるにもかかわらず、グラントの期間が短いというのも弊害の一つかもしれない。

質問13. 研究不正の原因はどちらだと思いますか？ <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	両方関係していると思います。
※	この質問は愚問です。どちらもです。
※	どちらもあります。本来は、未知への憧れから始まるものなのに、不正は必ず損をするという価値観を徹底させるしかない。
※	個人の問題である場合とその個人の研究に対する倫理を形成する過程に関わった指導者を含めた構造に問題がある場合がある。
※	個人と組織的な問題の併存
※	少なからず誰の心にもある他人に認められたいと言う願望？それが色々な原因で肥大化する。それは個人の問題かもしれないし、構造の問題もあるだろう。
※	両方あると思います。
※	両方だと思います
※	両方が絡み合ったケースが多いのではないと思う。
※	個人の資質でもあり、組織の構造的な問題でもある。
※	これは両方の問題で、どこの社会でも起こっていることです。問題は、科学という特殊性？から、どうしたらよいかという問題になってきているのでしょうか。
※	両方が相乗的に働いて起きている。
※	両方 これは当たり前のことでは？ このような分類をしてしまうこと自体、問題を見据えていないことの証ではないか？
※	マスコミの悪い側面
※	論文がないと研究費がとれない、職も得られない、というシステムをもって構造的欠陥というのは、犯罪者が責任を社会に転嫁するのと同じだとは思う。
※	個人か科学体制かの議論は不毛。
※	状況の問題
※	両方関係していると思います。上にも書きましたように、どんな状況になってもしない人はしないと思います。しかし、はじめはしないと思っていた人でも、研究費を維持して行くことが目的になってしまった人は、迫られる気持ちでやってしまうのかも知れないと想像します。
※	両方だと思います。
※	両方。
※	基本的には個人の問題である。ただし、業績至上主義の弊害が無いとは言えない。
※	双方
※	両方だと思う。
※	両方
※	基本的に、ルールをやぶることに拒否感が少ない、ルールをやぶっていることを意識できない、そういった個人の性状が大きいのではないのでしょうか。プレッシャーが原因としばしば言われますが、ほとんどの研究者はプレッシャーがかかっても全うな活動をしているのではないのでしょうか。
※	両者が相まって生じるものであり、どちらか一方に起因するものではない。
※	両方

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育	厳罰化では対処できないほど、この問題は根が深いと思う。研究をスタートする以前の段階（学部学生の頃）から、さらには小中学校の時代から倫理教育を徹底すべきである。
※	教育	研究者の良識に依存するので、教育が重要である。
※	教育	実験ノートの充実と保管リサーチミーティングの定期開催ポートフォリオによる研究業績の管理保存
※	教育	厳罰化は良くないと思います。要は不正をした場合は、科学の発展に何らの寄与もないことを教育すべきです。そういう学問を作ってもいいと思います。国立研究不正防止大学を設立して、卒業生は各大学に派遣されてそれぞれ専門部署で活動する。研究不正をした者は、実験停止の上、研究不正に関する補正教育を行う。それを拒否する場合は、辞職させることができる。というような制度はいかがでしょうか。
※	教育	厳罰化はどうかと思う。
※	教育	実験結果を正当に判断できる研究力を若者に身につけさせ、不正なデータを見抜けるぐらい実力をアップさせてやるのが、研究者として身を守ることに繋がるのではないかな。
※	教育	必ずしも研究者になる段階の大学院時代の教育というのではなく、幼児期からの教育が必要。誤解を生むかもしれませんが道徳心を高める教育、情緒豊かな人を育てる教育が必要。研究に向けた人材に思いっきり自由な発想で研究させる環境作り。大学院生になる段階で、また研究者になる段階で、適性を自らがよく考える。
※	教育	厳罰化も重要であるが、匿名の告発には誹謗中傷も多い。それにより、調査対象になっただけで、疑われたことへのペナルティーを科そうとした大学を知っている。日本では、行き過ぎる厳罰化は、研究者を冒険家や登山家並みにハイリスクな職業にしてしまう。給料も安く、リスクばかりあって、こんな仕事やっつけられないと言う人が増えることでしょう。
※	教育	教育と言っても、講義や講習でどうなる物では無く、社会全体として地道に遵法精神を高める以外に手はないと思われる。他方、起こってしまったことについての調査に対応する人員はあくまでボランティアで、当人達には大切な時間の浪費以外のものではあり得ない。せめて、こうした方々に金銭的な補償ができるように、不正が明らかとなった場合、不正を行った個人に対して不正解明のための費用を請求できる仕組みなど、学会をこえて科学界全体で統一した施策として用意しておく必要はある。
※	教育	教育が人の行動を大きく変えるから
※	教育	再現されない結果を世に送ることの影響を知らしめる必要がある。
※	教育	シンポ、講演会、説明会を機関で行う、学会で行う。
※	教育	明らかな捏造は論外であるが、データをどこまで真摯に扱うかについて、十分な理解をさせる教育が必要であろう。
※	教育	研究者がすべきことをきちんと教育する。それは、真理を明らかにすることである。厳罰化は難しいかも。仕事を放り出してやめた決して有能ではない総理大臣がまた総理大臣になれる社会だから。。。
※	教育	研究評価や個人の評価を多角的に公平に行う評価システムを構築する必要がある。研究の細分化によって、正当に評価できる審査員が少なくなっている。また、学閥等のネットワークが復活し、特定グループで資金を獲得しているケースが見られる。大学や公的研究機関では、最低限の研究資金の提供が必要であり、また研究者も最低限の資金で最大の効果をあげられるような努力が必要である。
※	教育	科学倫理の教育は必要だと思う。
※	教育	不正を行っている人は、「この程度の事は許される範囲だ」と勝手に思っている場合もあると思う。過去の事例や体験者のエピソードを聞く機会を得ることで、不正を未然に防ぐことができるのではないかなと思う。
※	教育	研究不正に到る背景を分析しないかぎり、厳罰化は「くさいものに蓋」で終わってしまう。
※	教育	データの管理方法や保存などについて、具体的で不正ができないような指導をする。研究不正をするなどとは考えられないという環境をつくる教育をする。
※	教育	研究者教育とか、学生・大学院生との接し方を教育するとかもしてほしい。
※	教育	時間はかかるが教育に力を入れるのが最善で効果的。厳罰化ではたちごっこになる。
※	教育	まずは教育です。日本で研究倫理を教えている大学はどれほどあるのでしょうか。また研究倫理に関する教科書も殆どありません。また、不正は知的財産権侵害とか詐欺的行為（不正な科研費獲得）として刑事罰を受ける可能性があるかもしれませんが、それに関する教育講演会が必要かもしれません。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育	データ整理等のミスや、知識不足による不正確なデータの取り扱いミスに対しては、十分な教育と、PIの努力(出版前に丁寧に確認する)が必要だと思います。意図的な不正に対しては、それを認定する公的機関が必要かと考えます。厳罰化しても当事者はいずれ否認するので、はっきりしないまま長期化するのでは。実験者とPIのどちらに問題があるか、両方なのか、の議論も難しいかと思ひます。
※	教育	実験科学におけるデータそのものの扱い方、統計処理、判断等を卒論、大学院時代に丁寧に、厳しく教育しておくことが大切である。
※	教育	研究不正を行っても、結局は得をしないということを教育すべきである。1つ不正を行なってしまうと、次の論文でも不正を行わないと辻褃があわなくなる。不正を重ねれば、いずれ破綻する。
※	厳罰化	少なくとも「教育」は全く無意味。ほとんどの人は今でも不正はしない。一般人を集めて「殺人や泥棒はいけません」という講演会をすることで殺人や泥棒が減ると思つたら大間違い。
※	厳罰化	厳罰化により飲酒運転は減つたと思ひます。研究機関がキチンと対応し、不正に対して厳しい対応を取る必要あり。不正が割に合わないというコンセンサスを十分に知らしむべき。
※	厳罰化	研究不正は研究費取得と大きく関連していると思われまふ。また、研究者の評価が沢山の助成金を取得することに関連していることが悪循環になっているので、まずは研究不正の根本である背景(環境)から変えないと不正は直らないと思ひます。それには、研究評価者の質向上が不可欠であると思ひます。それが出来ないとすれば鞭を使うしかなく、研究者生命を途絶えさせるような厳罰が必要かと思ひます。本学会の倫理に関係していた〇〇元教授および共同研究者は、説明責任も果たさないままに、これまでと何も変わらずにアカデミアの真ん中で税金を使ってお仕事をしております。誰も責任をとってないし、本学会も何も責任をとっていません。
※	厳罰化	二度と研究をできないような懲罰を与える。
※	厳罰化	万引の防止のため厳罰化されたように、研究不正がばれたら致命的なことになる必要があると思ひます。そうすれば学生やスタッフの実験に不正が起こらないように注意するはずですし、研究室のマネージメントの改善にもなります。
※	厳罰化	教育のみで犯罪は減らない。
※	その他	いつ、内部から告発者がでてもおかしくないという状況を作ることで一定の抑止効果が期待できる。
※	その他	モラルの問題であるので、対策を講じるまでもないと思ふから。
※	その他	・競争資金ではなく、通常分配される資金の充実・インパクトファクターに依存する紋切り型の研究者評価をやめる・ポストドクや任期制職者がアカデミック研究以外の職に就くことの得心
※	その他	業績の評価をもう少し多様化し、研究費の極端な偏りを無くするのが一番と思ふ。なにもフラット化する必要はない、現状が極端過ぎるのだと思ふ。
※	その他	日本版のNIHのような機関(研究予算配分まで執行できる)が必要申請時ではなく、執行後の精査が重要(申請グループの1人1人まで精査した業績報告とその精査)。但し、調査のための調査ではない。内部告発がよいとは思ひませんが、内部告発を受けて対応する機関も必要かと思ひます。
※	その他	意図的な不正を行う悪意の研究者は教育では矯正できない。追い込まれてやむを得ず？不正を行う研究者は厳罰化で防げない。研究のトレーサビリティを高め、トレースできない研究を結果だけで評価しない風土を作るしかない。
※	その他	教育というものは不正に対しては有効とは思わない。研究不正は欺すことである、というのは誰でも知っていることであるから。一部の雑誌で行われているように、レビュープロセスの透明化を広めることでまず、どのようなレビューが行われたかということを検証できる。その上でか研究不正が見つかった論文については、その論文のレビュー責任者がなぜ見つけられなかったか、の検証を行い、研究不正を防ぐ対策を行うべきであると思ふ。
※	その他	競争的外部資金だけに頼つて研究を進めると、どうしても外部資金がとれなくなると研究を続けることができなくなるというので、それを回避したいと考えざるを得なくなります。しかし、旧国立大学の場合ですが、基盤的研究費は数年前から殆ど措置されなくなりました。そこで、以前のように、基盤校費をある程度措置し、1-2年程度は、基盤校費だけで少なくとも最低限の研究は続けることが出来るようにするべきかと思ひます。そうすると、研究費に関する安心感が芽生えて、外部資金獲得のために研究業績を出し続けることを目的として、不正を行おうという誘惑に駆られる人は減ると思ひます。
※	その他	大学を減らし、真の意味でのエリート教育として科学を推進学位取得率を減らし、自分の力で論文の書けない学生の進路を断つよ似た学会の数を減らすよ似た研究課題と研究者を減らすむしろ、研究領野の多様性を増すもうひとつ学術雑誌を今の10分の1にする

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	その他	落ち着いて研究をできる環境をつくるべき。ポスドク→ポスドクの連続だと疲弊する。
※	その他	まずは、この分野の先進的な国に学ぶべきである。研究にまつわる様々なことを学んでまねをしてきたのであるから、不正に対する部分も、まずはまねるべき。問題が起きたら、少しずつ改良していけば良い。具体的には、第三者機関を作って、そこに当該機関、出資機関、学会、その他が参画し、期限を区切って何らかの結論を得るシステムを作ったかどうか。そうすれば、出資機関も知らぬ存ぜぬでは済まされなくなる。疑惑の研究者に研究費が支払われることも少なくなるのではないか。
※	その他	研究費の配分を少額、高採択率にする。大学院の定員を減らし、本当に研究をやりたい者のみが進学するようにする。修士課程、博士課程ともに入試にはもっと厳しい競争が必要。大学院生には広く奨学金がまわるようにする。
※	その他	不可能。どう対処するか意識を徹底する。
※	その他	ネット上では「ビッド」という言葉がよく出てきて、必ずしもまともではないようにも思いますが、少なくとも、今まで不正を言われた人々はネット上で名前が挙がっていました。PIIはそれに十分答えられるように備えておけば良いのです。あるPIIは、告発者の名前をネットで晒して、警戒するようなこともしていました。決して「便所の落書き」と言わず、有効利用したら良いのです。PIIは自信があれば、堂々としていればよろしい。指導などに自信が無いせに結果が欲しいから、ビクビクするんです。
※	その他	今後どういう対策をとることが望ましいのかはよく分かりません。ただ言えることは、まず「起こってしまった不正事件」について早急にケリをつけるべきではないでしょうか。学会自らが「自身の恥」を明確に認めて、それを乗り越える姿勢を示さない限りは、今後もヘチマもないと思います。*ケリをつけること自体は、学会には不可能なのかもしれません。ただ、上にも書きました「自分でできること」にはまったく手を付けず、〇大に早くやれと言うだけの現状では、学会は何もやる気が無いんだなと思えます。
※	その他	ORIのような組織の設立と、誰の目から見ても明らかな故意の事例に対する厳罰化
※	その他	わからない。
※	その他	罰は軽いほうがよく、逆に調査は詳細に行い、未確定な内容も含め結果はすべて公表するような方向が望ましいと感じる。
※	教育/厳罰化/その他	研究者自身の倫理観の問題だけでなく、不正が発覚しないで許容されているように見えていることが一番の問題ではないか？
※	教育/厳罰化/その他	研究費申請の計画調書に、過去の論文業績をつけるが、「申請書の記載成果と論文業績には偽造・捏造のデータは含まれていない」ことを「宣誓」させて、署名をさせることが必要かもしれない。その後、偽造・捏造が発覚すれば、公文書偽造の罪を問うことができる。
※	教育/厳罰化	上の人も下の人も価値観を徹底させる。難しいのは、人事権を握られてしまうと苦しいかな。厳罰化は必要ですが、果たしてそれで根絶できるかといわれると、たぶん無理でしょう。
※	教育/厳罰化	厳罰は一義的には不正を行った本人に行うべきと考えます。多くの場合、筆頭著者だと思えます。しばしば指導教官が糾弾されますが、たとえばポスドクによる巧妙な不正行為を見抜けるわけがありません。
※	教育/厳罰化	モラルは教育できるものだろうか。不正は覚せい剤、万引きを同じ人間が繰り返すのと同じで、欲望に負けて犯す犯罪な訳であるから一線を越えるともう辞めてもらうしか無いだろう。そういう教育は必要。
※	教育/厳罰化	研究者以前に、ヒトとして、全うでないと言うことは、教育の問題であり、何らかの厳罰は仕方ない。ただ、それで減るかというのは難しい。一度、集団が腐敗すると、それを直すのは難しい。というのが、一般なので。研究者が性善説というのは、日本では、2000年以前のような気がする。
※	教育/厳罰化	研究不正に手を染めて、それが成功体験となっている研究者に今更教育しても手遅れですから、厳罰化にて対応するしかないと思います。ただ、これからの将来を担う若い人たちには、何らかの教育的なプログラムを準備できればいいと思っはいるのですが、実現するのはなかなか難しそうです。
※	教育/厳罰化	不正をしてはならないことを教えて物重要だが、不正でポジションを得た研究者がのうのうと大学の教授をしている状態を変えないと、不正はなくなる。研究費の返納や解雇、数年間の研究申請中断などの処分が必要。他の多くの研究者に迷惑をかけることになるので、不正を行った者は本人が学会で謝罪すべきでは。
※	教育/厳罰化	本来は個人のモラルを向上するのが理想だが、現実を考えたとき、不正を行うことのリスクをもっと厳しくするしかないでしょう。研究費不正に対する罰則に比べて、論文ねつ造に対する罰則は甘過ぎると思う。
※	十分でなかった	敢えて言うなら、初等教育の充実、人間教育。意図した不正と不作為のものを厳密に分けられることを前提に、厳罰化は効果がある。ただし、内部告発を煽るような低レベルのムーブメントを誘導しないような工夫も必要。
※	教育/厳罰化	どんな社会問題に対しても、教育と厳罰は必要である。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由と具体的な対策案
※	教育/厳罰化	PIを対象とした研究不正防止のための啓発活動が必要です。
※	教育/厳罰化	まずは教育、そして行なったら厳罰の両方が必要でしょう。
※	教育/厳罰化	教育は必要不可欠。具体的にねつ造による損害(その人個人のみならず、研究分野に対する損害も)を紹介すべきかも。
※	教育/厳罰化	「1. 教育」が機能していないのは、分子生物学会年会で研究不正を起こさないようにとの企画に係った方が疑惑の対象となっていることから、十分ではないことの証拠だと思えます。
※	教育/厳罰化	不正事例の調査と報告の情報共有、不正防止の対策の提案などが公開されるようなシステムが必要である。
※	教育/厳罰化	以上の観点から、現在のように資金と雇用と深く関与した形の科学研究であれば、研究不正の根絶は構造的・原理的に不可能というところから出発すべき。なので、基本的に個人の倫理に訴えることは繰り返し行うべきだし、教育も継続しなければいけないが、社会がどのように軽犯罪抑止を試みてきたのかを反芻するほかないと思う。もう一つの方策は、その前提(成果を資金、学位、雇用と深くリンクさせる)という前提を崩してみることだが、これは「研究不正を根絶する」と同じくらい夢物語のようだ。
※	教育/その他	極端な「選択と集中」は不正の温床になっているように思う。安定して長期的な研究が行える環境が望まれる。
※	教育/その他	意図的な研究不正には、厳罰化など、何の役にも立たないと思います。研究不正がいけないことなど、みんなわかっているはず。それでもやってしまう背景を解決しなければ、unhappyな人間を増やすだけです。過度な業績至上主義により、学問の自由な発展が妨げられたのが背景としてあると思う。意図しない研究不正には教育は必要です。データの扱いがなっていない人が多過ぎます。
※	教育/その他	罪悪感を感じない研究者の心の強さを維持すること、また、個人が一線を越えることに加担しない諸制度の制度設計。厳罰は導入するとしたら、大学・組織が対象とされるべき。今の組織は免責条項の整備に腐心していると思われる。
※	教育/その他	これから研究者を目指す若手だけでなく、既に確立されたポストにいる研究者に対する教育も重要。なぜなら、研究室のヘッドは成果を追求し、若手研究者がそれに応えようとする中で生じる不正もあると思われる。また、一番公平な評価はインパクトファクターであるという安易な発想ではなく、特に人事の際は、労力は必要であるが、その人のサイエンスに対する考え方も含め多面的な評価が重要となる。
※	教育/その他	学生への教育は行っている
※	教育/その他	常に研究室で行われる実験等は公のものであるという認識を皆が持つべき。
※	教育/その他	不正の事例を知ることは、大学院生レベルでも教授レベルでも重要と思います。事例集を作成してはいかがでしょうか。
※	教育/その他	研究不正の多くは研究資金の枯渇や任期付ポジションでのレイオフに対する不安・焦燥から来るものと考えられる。現状では研究環境やポジションでの格差や一極集中が度を越えているにもかかわらず、さらに格差を助長しようとする政策が是認されている現状を深く憂いている。自らの生存権が確立した後に初めて教育の効果が発揮されると思います。
※	厳罰化/その他	不正検知には匿名化が必須であり、組織外のコミュニティの働きが大事。2チャンネルは侮れない。
※	厳罰化/その他	研究者の倫理感は大事で、その様な教育はすべきだと思うが、それよりも厳罰化によって、間違いを許さない姿勢を示す必要がある。また、研究費の増加によって競争的資金が無くとも研究ができる環境であれば不正は発生しにくい。
※	厳罰化/その他	教育はもちろん大事ですが、そんなことは皆さん分かっているとおもいます。上記のように不正を同定できるようなプログラムを幅広く(雑誌や各大学で)導入し、不正が入った論文を排除できるようにすることが重要と思います。それでも悪意あるものは防げませんが、やらないよりはましです。
※	厳罰化/その他	不正行為の当事者が処分されるのは当然だが、その指導者(教授など)は責任者として少なくとも講師以下(准教授もダメ)に降格処分をうけるべきである。不正を誘導した教授がトカゲの尻尾切りでのうとうと生き長らえられている限り、不正は絶対に無くならない。
※	厳罰化/その他	原則として懲戒免職にするべき。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者番号	その他記述
※	論文業績主義の緩和、および過度の研究費集中の抑制
※	不正を匿名で告発できる制度をつくる。その際に、告発者のプライバシーが守られるように、第三者機関に告発窓口をもうけるべき
※	研究状況の改善
※	特別の対策の必要はない。
※	論文成果に偏りすぎない評価システムを学術界で検討すべきである。
※	決定的な解決策は、ないと思いますが、研究を始める初期の教育が重要だと思います。
※	ゼロになるのでしょうか？極めて疑問です。
※	PIなら研究費の獲得、ポスドクや任期制職の場合はポジション獲得のためにインパクトファクターの高い学術誌に論文を掲載する、あるいは、多くの論文を掲載するために不正やねつ造を行っているという構図が目立つ。この構造を改めなければならない。
※	過度な業績至上主義の是正
※	研究成果と予算執行の精査
※	すべての研究記録の公開を義務付ける。
※	競争的資金ではなく、基盤的研究費を措置すること。
※	論文のインパクトファクターで人事を決めるのをやめるべき。別の方法で科学者としての能力を見極めるべき。捏造問題も大きな問題だが、こちらの方がもっと深刻な問題である。論文リストは立派でも、科学者として失格な似非科学者が多すぎる。
※	行き過ぎた成果主義を是正する
※	科研費制度などを含む全体の制度設計。
※	倫理学（道徳とはちがう）という学問は、日本の教育システムのなかで、あまり重要視されていないように思われます。特に、現在の大学教育の初期教育の中で、どれほどの学生がこの学問体系を理解し、自分の思考体系の中に組み込んでいるのか疑問です。
※	日本のグラント、人事評価、その他の審査、評価体制を根本から見直す。
※	才能のない学生を研究に誘い込み、学位を与えた教官の不見識に努力や苦勞を重んじ、学生の才能や個性を伸ばそうなどという勘違いの教育理念つまりは日本流の民主主義才能のない人間が職に就くほどの悲劇はなく、それに気がつかないことほど社会にとってのマイナスはない
※	不正を目にした良心的な研究者を救うことが必要。まずは不正について相談できる窓口を設けることがよい。そして、必要に応じて当事者に話を聞く、調査委員会を設ける、など段階的な対応をとってゆく。
※	第三者機関や学会による迅速かつ正確な真相究明
※	ルールの策定。過去に起きた事例をきちんと記録に留め、公開する事。それが教育に一番役立つ。罰則だけを強化することは問題である。
※	不正を検知するしくみ。厳罰化が良いとは思わないが、不正を見逃す、もしくは不正対応に甘い組織に対するペナルティは必要だろう。
※	研究資金の中立化
※	サバティカルのように、夏休みなどを利用した研究者の交流が実現すると、不正はしにくくなると思うし、共同研究の活性化につながる。
※	一人の人に、あまり大きな研究費が集中しないように、もっと少額で広く配分されるほうが良いと思います。研究室が大きくなりすぎて、それを維持するために、無理して次の研究費を取りにいこうために不正してしまうということはないのでしょうか？また、ポスドクや院生も、有名ジャーナルに出せば、受賞や奨学金やら、正のスパイラルでどんどん恵まれた状態になりすぎるのではないのでしょうか？昔は、奨学金もそんなに無かったし、学会に行くのも自分でお金をためて行きましたが、今は変に競争精度になっていますから、あまりにも恵まれている人と、一生懸命頑張っている人もそうでない人の差が付きすぎるように思います。
※	上記の構造の問題は、十分に検討し、対策を練るべきであろう。
※	競争的資金を得なくとも基礎的研究ができる研究環境を整えること。
※	ジャーナルのImpact factorの重視しすぎを学会が主導して改めること。
※	ネットでの自由な告発
※	過度な短期的業績主義の廃止
※	両方。
※	不正を見抜く機関の設立
※	論文至上主義を改める。
※	風通しのよい研究環境。
※	IFとCIIによる評価を廃する。
※	論文記載の実験結果の再現性等を報告、議論できる公の場を作る。捏造、偽造、盗用以前に、論理的な実験の構築、正確な実験、適切な解釈というものがもっと浸透するように教育的効果も含める。学会等から委員を送って運営する。
※	コピーペーストが不正に使われるケースが多いが、そのような不正なら見つけられるプログラムはあるはずですが。
※	極端なプレッシャーと論文名のみを評価する体制（Job取得および資金獲得において）の変革が必須。
※	指導者の降格処分（減給や抵触などの手ぬるい処分はダメ）
※	研究ポストにいる人材に対しての予算配分について再検討する。配分する予算がない十分な研究ポストは廃止を検討する。

質問14. 研究不正を減らすためにはどのような対策が必要ですか？ <複数回答可>

回答者 番号	その他記述
※	各人の倫理規範に対する認識を高める。厳罰化は根本的解決にはつながらないと考えます。
※	過度な競争社会とならない研究環境の整備。
※	わからない。
※	人事につきると思う。
※	罰は軽く、公平に。
※	時間的なゆとり、経済的なゆとりを科学者にも与えてあげたい。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	どうみても、ものすごく内容の濃い(データが重い)論文を次々と発表しているところがあるとすれば、やはり、どこかひずみが出ていないはずだと思います。あるレベル以上の研究費を取得したところでは、第3者が、聞き取り調査をする必要があるのではないのでしょうか？(ポストクの待遇状況、勤務状況、など)
※	大学院における教育の中で、きちんと次の世代に伝えてゆくことが重要であろう。背景には若手研究者のキャリアパスが見えなくなっている問題も存在するので、学术界が社会に働きかけて改善してゆくことも必要な対応と考える。
※	「まあいいや」と思って、小さなごまかしをして論文を作り上げた教授は日本にごまんといっているのではないのでしょうか？。また、不正が噂になっている教授も沢山いるのではないのでしょうか？。そんな先生方は、何事もなかったかのように、65歳になったら科学実験の世界から去り、審査や評価の世界に行ったり、教育のみの世界に行っています。私が学生だった30年前ぐらいは、研究費不正、セクハラ、研究不正は当たり前の世界。それが、月日がたてば、研究費不正、セクハラはかなり稀になってきた。最後に残ったのが、研究不正。かと思えます。毎年、毎年、すごいなあと思うような出来過ぎの成果を発表される先生方がおります。これは、不正をしているに違いないと心の中で思っています。これも嫉妬でしょうか。それが不完全だから面白い生物の人間です。
※	実際の現場では、もしこうならいいのにそうならずに困ることはある。しかし、だから捏造ではなく、でもやっぱり捨てがたければ別な家庭なり方法なりにトライする精神風土を作れば。
※	学会の目的をもう一度学会長を含めて考えてください。若い研究者がこの学会から抜けていくのを危惧しています。
※	難しい問題ですね。
※	不正に対しては懸念を表明するくらいで、深入りしなくてもいいのではないのでしょうか？研究倫理やデータの取扱いの教育は大いにやってください。
※	予算の重点配分も重要であろうが、恵まれない基盤研究者への目配りなしに日本の科学技術は近い時期に破綻する可能性がある。某ノーベル賞学者の研究の例を引きまでもないが、研究費を突然根拠もなしに削減することも、この研究者の捻じ込みによって復活することも、いずれも不公正である。また、某ノーベル賞学者のように、受賞するまではほとんど省みられないにも関わらず、受賞後突然予算が降ってくる、これも不公正であろうよりは、予算審査にあたる委員の先生方がどう審査なさっているのかを反省して頂きたい。
※	この問題に学会があまり深く関わる必要はないのではないかと考えます。
※	だれでもコミットするチャンスはあるのだという事を徹底し(そういう意味で麻薬、万引きと同じ)、これが特別な人がおかす、特別な事だ等と言わない事だと思う。一線を越えると研究者は辞めなければいけませんというそういう教育を徹底すべき。また、データは正しくないといけないが、解釈は自由、間違っても良い(訂正して行く事が可能)のだという点を徹底すべき。データが正しければ誰にも迷惑はかけない。
※	学内の不正を見ていて、絶望的にしか見えない。誰も鈴をつけることができない。自分より、ずいぶん年をとった大人なのに、みっともない。そうした、昔から、日本にあった、みっともないとか、恥ずかしいとか、そういう部分がなくなったことそのものが、研究という領域にも影響しているだけではないかという気がする。
※	少しでも疑義がもたれたら即刻回答すべき、一方疑義が晴れた場合に疑義を出した方には、しっかりと懲罰があるべき。研究を真面目に行っている者にとって、言いがかりもどきの落書きによって影響を受ける研究者の身にもなってもらいたい。研究とはいかなるものかを教えてこなかった指導者にも大いに問題があるのでPIは再度襟を正すべき。他にも問題がうやむやになっている分子生物学会に関係する〇〇大学教授、〇〇大学教授、〇〇大学教授などに学会としてきちんと対応すべき。そして、二度と起きないように教育すべきである。間違いが起きたら、それは謝罪してもう一度研究に真摯に向かう姿勢をみせるのも教授たるものの姿勢ではないのでしょうか？理事長のお膝元でもおきているのですよね。
※	まずはIFの高いジャーナルに掲載されることや、研究費を取ることが必ずしも素晴らしい研究ではないという環境を急ぎつくるのが肝要かと思えます。IPS細胞の一人勝ちのような環境をつくり、皆が勝馬に乗りたがるような環境があるうちは対応が不可能かと思えます。若い人の教育も重要ですが、指導者がハイIF＝研究費＝評価が高いと考えて仕事をしていれば、それが正解と若い人達は理解します。とにかく、研究者の室の向上(志づくり)が必要かと思えます。しかし、実際には難く時間もかかるので、その間は独立した査察機関をつくり、厳罰をもって対応するしかないかと思えます。
※	研究不正自体は、大きな問題ではない。本当に重要な問題は、研究者が科学よりも職業を優先している現状にある。科学者としての喜びは、素晴らしい発見をすることにあり、捏造などというものは科学者と本来全く関わりのないものである。捏造は科学者の人事が科学雑誌の格付けのような本来科学と関わりの無いところで決定されることに起因する。人事委員会が候補者の科学者としての能力を判別する自信・能力がないために、インパクトファクターのようないかにがわしい数値を絶対視して人事を進めた結果、大学は科学よりも職業に関心のある似非科学者で埋め尽くされてしまった。こうした状況が続けば、捏造が蔓延するのも自然な成り行きである。科学を出世の道具とする人間には大学から去っていただき、科学を科学者の元へ取り戻すことが必要である。そのような啓蒙であれば、有効ではないかと考える。
※	一部には、不正の原因がデータのフラクチュエーションがもどになるデータ解釈の多様性にあり、技術的に解決可能であるとの主張がある。一面、データの有意性をどう認識して解釈にもってゆか、という点が技術的(即ち、研究者側のメンタリティーに依存せずに)に回避できるのは良いことである。しかし、逆に言えば、さらに研究が進んでより微妙なデータを扱うようにあった場合には、再び同じ問題が持ちあがるわけで、件曲は本質的議論出ないのは明確である。倫理面で研究者の精神面を高める必要があるのも確かであるが、「なにをもってなにをいうか」という実験科学の基本的な能力を高める施策を、少なくともこれから研究者とな若い世代に確実に施してゆくことが、将来を見据えて必要だと思われる。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	学会としての取り組みを透明化すること、またその取り組みに対しての意思決定を柔軟に行うことができる態勢を整えることなど。
※	不正ではないものの、再現性のない論文、質の低い論文の蔓延も深刻な問題。
※	米国でポストドクやPIをしていた時には、きちんとしたworkshopなどをしてその受講を義務づけられていましたが、日本はあまり熱心ではないですね。
※	若い学生など、何が不正か何が不正でないか、わかっていない人が存在します。つまり、顕微鏡をのぞいてレンズ越しに本物の資料をみたことがなく、コンピュータの画面で細胞を見ることしか知らない人たちにとっては、画像を処理することは当たり前ですから、何が不正かどうか、わからないということになっているようです。
※	まずは、このような問題に早くから取り組んできたアメリカを見習って似たようなシステムを導入し、日本ならではのシステムへと改良していく。
※	個人的な原因が80%と思います。が啓発行動は時を見てすべき。
※	ありすぎてここには書けない
※	日本では、研究不正や研究倫理の国際的な基準が多くの研究者に十分理解されておらず、教育もほとんど行われていない。そのため、例えばオーサーシップについては無法状態といってもよく、「研究に材料を提供しただけといった研究にはほとんど関わっていない研究者をオーサーにいれる」、「本人に無断でオーサーとして名前を入れる」、「名誉のオーサー」などの不正を不正とは認識せずに行っている研究者が少なからずいる。科学技術に関連する省庁、特に文部科学省が研究不正や倫理に関する国際的な基準を研究者に周知させ、大学院での研究倫理教育を奨励するよう学会から要望して頂きたい。
※	不正を目にした良心的な研究者を救うことが必要。まずは不正について相談できる窓口を設けることがよい。そして、必要に応じて当事者に話を聞く、調査委員会を設ける、など段階的な対応をとってゆく。Q8等で「現在、研究不正が告発されると当該研究機関（大学、研究所など）が調査し、報告することになっています。」というのは、誤解であろう。そのような決まりはない。当該研究機関のみでは制約がある。学会も調査する必要がある。他の学会もそのようにした。
※	○大○研の論文データ捏造問題はもはや公のものになっています。日本がこの問題に正面から対処していないことは世界の中でも明らかになっています。学会が日本の研究分野を少なからずサポートする立場にあるのなら、○大の対応如何に関わらず、社会に問題提起をする義務があると思います。問題を解決せよとは言いませんが、問題を提起することは非常に大切だと思います。
※	誰の「対応」なのか？誰への「要望」なのか？明確ではないが、おそらく、「分子生物学会」の対応や、「分子生物学会」への要項、という意味と考えて、意見を述べる。既に述べたように、学会の対応は、「極めて見苦しい」。トップで議論をしていないはずはないのだが、外からはそれが全く見えない。開かれた学会との印象を持っていたが、極めて閉鎖的な学会であることを社会に示してしまった。学会の発足以来の最大の危機ともいえる時に、最も学会のトップの役割が必要とされた時に、「判断」をできなかった事は、トップの資質がないことを明確に示してしまった。繰り返すが、行動すべきときにその判断ができず、なにもしなかった。その事実は重い。できるだけ早く交替すべきである。この事実にごりだけの学会員、特に希望に燃えた若い学会員の失望を買ったことか。
※	なぜいけないか？誰に対していけないのか？わかっていない人が多いし、そもそも科学とは何かを真剣に考えている人が少ない。教育が貧困である。
※	公開されるとのお話だった第35回日本分子生物学会年会における緊急フォーラム「研究不正を考える-PIの立場から、若手の立場から-」の報告と発言録が半年以上経っても公開されていないようです。他の企画の報告は2月発行の会報104号に公開されている事を見ますと学会での対応もおそいのではないのでしょうか。
※	サイエンスは本来楽しいもの。不正をしてもサイエンスは楽しくない。それなのに不正をしてしまうのは、サイエンスを楽しむ制度が未熟なため。一般研究者に十分な予算が配分され、研究職が提供される制度が必要である。
※	研究不正を厳格に規制してもきりが無い。どのような研究不正が取りしまわれるべきものを明かにすべきではないか。本来、研究不正に大小はないというのが建前であるが、やはり影響力の大きい雑誌への投稿論文が対象となるであろうし、その点を明確にしておくべきかもしれない。また、安易な共著者への連名を抑制するためにも、共著者の責任も問われるべきであろう。大変デリケートな問題も含まれるので、実際に起こった事例を参考に良く論議を尽くす必要があると思う。
※	最近のトップジャーナルは、以上にきれいなデータを求めすぎる傾向があると思う。再現性が難しいチャンピオンデータでも出さなければ受理されないような状況は、不正を誘導しているようにも思える。
※	科学を発展させて人類の幸福に貢献しようとして基礎研究の世界に入った人が大半であると思います。おそらく研究不正を行った人たちもほとんどがかつてはそのような高い目標を持っていたと信じます。また個人的に有名になりたい、他人より優れているという確信がほしいという理由でこの世界に入った人もいることは確かだと思います。しかし、いずれの場合でも、行った研究が真実ではないならば、全く意味がないことに気づくべきであり、それはやはり教育であると思います。真実でなければ本当に貢献することはできないし、たとえ一時的に有名になっても、すぐに本当のことは明らかになります。不正を行うことが、将来にとって何の解決にもならないし、将来が消滅する可能性さえあることを教育すべきと考えます。
※	日本の基礎研究費はGNP比にすると先進国では低い方だと言われている。研究に関わる者に対する経済的な保証（給与と研究費の両方）をして、もっと基礎研究を重視するべきだと思う。さもないと日本の研究は地盤沈下する。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	ジャーナルのImpact factorの重視しすぎが研究不正における諸悪の根源だと思います。研究の評価の最も重要なポイントの一つは、その研究が再現可能かどうか、ということです。この点が、現在の研究費申請や、人事などでの評価で、この観点が全く欠落しており、IFの高いジャーナルに論文を出しさえすればよい、という業界の慣習になってしまっていることが問題だと思います。
※	これほど頻発している科学不正に対し、研究者が率先して「捏造を防ぐ仕組み作り」をしなくてはならない。仕組み自体には研究者が主体的に参加する必要はない。むしろORIのような専門機関が調査の実施を行い、学会や専門家がそれに協力する形で調査を行うようにすれば良い。それによって、1)調査のスピードアップ、2)調査の公平性・透明性の確保、3)Funding agencyとの連携による速やかな処置（資金の停止等）、4)処分の公平性・透明性の担保、等が可能になる。このような機関が創設されれば、捏造者にとってリスクが高まり、捏造の誘惑はきっと低下するはずである。
※	最終的には、その研究者の人格、品格の問題だと思うのです。悪い噂がある研究者には、金が回らないようにすれば良いだけです。噂だけで十分。教育なのか思想なのかわかりませんが、何らかの問題を抱えているような人だから、不正を働こうとするのです。兵糧攻めが一番です。「1度やったら研究者として終了」なら、不正をやる人はいなくなるのでは。また、世間の人にも、科学教育をもっとすべきです。つまり、世の中は、何に役立つか、に縛られ過ぎです。また、1つの現象の原因を1つにしたがる（単純化したがる）ようです。生命現象はそんな単純なものではありません。
※	ORIのような組織が調査し、その結果、研究不正があったら伴うORIによる厳罰が必要。
※	研究費の審査の重点が直前5年間の業績におかれ、また獲得した研究費についても短期的な業績報告が求められている。本当に独創的な研究には長い時間がかかるので、芽を育て、ゆっくり熟成するシステム、が必要である。
※	このままの状態ですと、研究者自らの手で、研究という行為そのもの、社会的信用を崩壊させてしまうことが気がかりです。話題に出ている例より、もっと巧みな不正行為例があるとしたら、研究そのものが成立しなくなる。論文がretractされているのに、その業績をもとに得られた予算が何の制限も無く期間内払われているのも驚きます。真面目な熱意ある若者が研究の世界にますます入ってこなくなるのではないのでしょうか。
※	早急に国全体として対応すべきです。
※	なぜ不正に到ったのか、背景分析が必要。不正が発覚するとにかくマスコミも含め社会的抹殺のごとく物事は動くが、何が正義で何が不正かきとんと社会が理解したうえで、行動することも必要。
※	特にありません。
※	不正は大昔から行われてきたはず。最近、不正に注目が集まり、不正を暴く技術の進歩もあいまって、不正の発見率が上がっている。不正を働くインセンティブは依然としてあるが、そのリスク（罰則規定）も十分過ぎるくらい大きくなっているの、あとは個人の良心の問題。システムは現状のままよい。不正をゼロにすることはできないし、その必要もない。
※	業績至上主義をやめること。権威主義にならないこと。
※	甘いかもしれないが、研究不正を行った研究者がある程度の収入が得られる職に就くことが出来れば、正直に対応する者もいると思うので、そのような者を例えば不正調査といった職に当てる。あるいは全く別の分野の職を提供できる体制をつくる。
※	近年多いのはいわゆる有名研究室の不正で、それらを引き起こしているのはトップの野心のように思える。ポスドクの任期が迫っているから止むをえなく、というケースも勿論多いと思うが、それらは論文の質や数の点で比較的与える影響が少ないでしょう。ポスドクにしても、トップの意向には従わざるを得ないので、トップがもっとまじめな考え方をしていれば、件数としては減るのではないのでしょうか？結局どれほど偉くても不正をしたら、クビという位厳しくすれば不正は割に合わなくなるので、厳罰化が一番と思います。その意味で一番の問題は身内を庇う組織の体質ではないかと思えます。厳罰化するとどうしても納得いかない本人との間に裁判が生じる可能性があるの、それをどううまく処理できるかが一番の問題と思えます。クビにするのが難しければ、科研費の停止期間を長くする、人事をストップする、下のスタッフを他の研究室預かりとする、ということが合法的に出来ればよいのですが。
※	現在の大学や学会の対応は全く手ぬるい、仲良しクラブの体質そのものである。指導的立場にある多くの者が多かれ少なかれ不正行為を（自ら行って、あるいは見逃して）今日の地位を築いているので、改善は見込めない。
※	科学とは真理の探究のはずが、地位と名誉と収入になってしまうのでこの様な事が起こるのではないか。どのような研究にも、研究費が十分配分されると、ねつ造する必要はなくなる可能性が有る。また、研究費配分の際の成果主義もpン台だと思う。論文の発表は無いがアイデアは素晴らしい申請というものが現実に採択されない事も問題である。研究費のシステム、成果発表のシステム等を変えることは大きな対応の一つになると思う。
※	分生としては、Gene to Cellで不正がないかを査読者と協力して見ぬくように努力していただければと思います。インパクトが弱い研究成果でも、確実なデータが掲載されている雑誌は、今後評価されるようになるのではと思います。
※	研究倫理については、各ラボごとに行っているのが現状だと思います。これを各大学院でシステマティックに教育するように改善する必要がありますし、その教育資料（教材）については分子生物学会など複数の学会が協力して作成し、提供してはいかがでしょうか。オンライン講習などあれば、たいへん効果的だと考えます。

質問15. 研究不正や研究倫理への対応に関してのご要望やご意見

回答者 番号	ご要望やご意見
※	研究不正は個人の価値観とモラルの問題ではあるが、形式的な枠組みや処罰を決めても、すり抜けてしまう人がいる。意図せずに不正なことをしてしまうこともあり得るが、確信的に働く不正と、不意とは区別しがたく、不正を防ぐために無闇にチェックを厳しくすると、研究の妨げになる。一方、他人のアイデアの盗用によって世界的に有名になっている大御所の先生もいる。小御所くらいの人は無数にいる。しかし、盗用を証明することは難しく、逆に盗用された側が批難を受けることもある。こうした状況を解消せず、表面だけの取り締まりを行っても「うまくやった奴の勝ち」というだけのつまらない結果に終わる。
※	不正に対する対応が、ほとんどが中途半端であるため、不正行為に対する抑止力になっていない。いくら灰色と周りか思っている、本人が居直ってしまえばポストを維持できるのは問題である。
※	多くの捏造は、画像の（後から見れば）稚拙な再利用や加工から発覚しているようだ。だから、技術的にはそこを集中的にチェックできるアプリの改良などは奨励されてよいように思う。興味深いことは、Youtubeや2chの登場で、匿名のチェッカーが不正の暴露をしているケースが最近が多い。というより、論文不正に関して言えば、学会にしろ研究機関にしろ、公的な機関が動くのは、その後始末の段階であることがほとんどなのではないか？ これは公式な第三者機関ではないが、第三者がゲリラ的に行っている活動であり、「こうしたことを活性化するにはどうしたらよいか」という視点もあり得るのかもしれない（オープンソース化？）。反面、こうした図の加工以外での不正行為は、なかなか発覚しないであろうと予想される。実際、どの程度水面下にそうした例があるのか分からないが、分からないがゆえに不安を覚える。
※	ねつ造、不正をしてでもトップジャーナルに論文を出しさえすれば、ポジション、研究費を取れて、ばれてもおとがめ無しでは研究教育において非常に深刻な問題となる。また、まともに研究している人が本来つけるはずのポジションや予算を不正している人が占めているのもおかしい。論文ねつ造、不正が指摘されている研究室でも何も知らない学生が配属されてしまい、その文化がさらに拡大することなども問題である。

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	十分だった	学会自体が調査すべき問題ではなく、現時点では調査権をもった大学に対して積極的に情報公開を迫ってきた。またワークショップをつうじて研究不正に対する取り組みを真剣に行ってきた。学会が行う活動としては、これで充分であると考えます。
※	十分だった	啓発活動は推奨するし、十分と思う。一方、不正に関して意見を大学に求めたり、不正の審査等は学会がやるべきではない。
※	十分だった	研究不正についてのワークショップの開催や、大学への調査の督促など、出来ることはほぼやられていると思う。
※	十分だった	これ以上やる必要がないという意味です。
※	おおむね十分だった	きちんと学会としての意見や態度を表明したと思う。また、啓発にも努力してきた。しかし、啓発してきた人が捏造疑惑で辞職では・・・どうなんだろう。
※	おおむね十分だった	大変一生懸命にやられていたと思います。担当の方の負担が大きすぎると思います。
※	おおむね十分だった	ワークショップや集会も開かれているのでおおむね十分だと思う。
※	あまり十分でなかった	研究倫理に関して、学会がワークショップなどを主催してきたことは評価できるが、主催者の一部が実際に研究倫理上の問題を引き起こしてしまっ、逆に信頼を損ねてしまった感がある。なぜそのような人選を行い、その結果に対して学会がどう責任をとるのか、説明がなされていない。
※	あまり十分でなかった	「研究倫理問題」に委員だった先生が不正をしませんでしたか？
※	あまり十分でなかった	捏造が減っているようには思えない。学会で研究倫理のワークショップを開催した人物が、捏造をしていた。
※	あまり十分でなかった	研究不正の当事者が倫理問題または若手研究者の将来について学会で語るなど笑い話にもなりません。
※	あまり十分でなかった	疑わしいと言われている研究は他にもあるので。
※	あまり十分でなかった	調査権はないにしても、いろいろな意見の表明はできるはずである。日本のオピニオンリーダーとしての役割を自覚し、果たすべきであったが、それが十分できていない。
※	あまり十分でなかった	本当に反省すべき人(そういう人はもう終わっているのですが)が、聞いてるとは思えないので。
※	あまり十分でなかった	研究不正を議論した委員が、それで退職しているのはいかがなものか？
※	あまり十分でなかった	不正が認定された研究者に与えた賞、名誉、会員資格等は剥奪すべき。それをやっていないのはおかしい。
※	あまり十分でなかった	Q12にもコメントしていますが、残念なことです。学会内で「研究倫理」を声高に話している方の中にも決して問題が無い訳ではないということを知っております。
※	十分でなかった	研究倫理を担当していた理事が論文不正問題の当事者になってしまったことが端的に表している。
※	十分でなかった	理事などの上層部やその経験者にも不正を行ったものがある。そのことが全く反省もされていないし、責任もとられていない。
※	十分でなかった	不正に対して、色々意見を述べていた人物が不正に関わっていたにも関わらず、その点について学会としての対応がうやむやだったと思います。どのようなことでそのようなことになったのか、すべて明らかにするとともに、どこかで公表していただきたい。
※	十分でなかった	かつての分子生物学会の論文不正防止？の会の委員長の研究室で不正疑惑が相次いでいる。その論文の筆頭著者はいまだに職についている。最先端・次世代～の研究費も支給しているし、学会にも散会している。これで学会の対応ができているとは到底できず、世間が知ったらいい笑い物になるのでは？
※	十分でなかった	上述したように、怪しいケースに対しては「念のための調査依頼」のような行動をまったく行っていないように見受けられる。
※	十分でなかった	分子生物学会が過去に行った研究倫理に関する活動が、完全に失敗だったことを認めねばならない。不正の中心人物が研究倫理を声高に叫ぶのを許してしまった原因を究明する姿勢がなければ、若い研究者は誰も相手にしないだろう。
※	十分でなかった	学会で中心となって活動していた人が、不正を行っていたのは、人選がまずかったと思われる。
※	十分でなかった	うわべだけ。でも今回ことさら大きくするのはなく、しっかりけじめをつけるべき。
※	十分でなかった	過剰に反応し過ぎている。学会で「騒ぐ」のではなく、日常的な対応が必要。
※	十分でなかった	少なくとも、昨年度の企画は、Q15の回答とも関係して、きっかけとなった事案に対して責任ある立場の学会が行ったものとしては、不適切だと考える。
※	十分でなかった	集客数が問われるイベントの開催等では仕方のないことだが、表層的でポーズだけという感じもする。地道な活動とは到底言えない。
※	十分でなかった	研究倫理委員会のメンバーが、以前、不正を働いていますよね。若手を倫理教育しようとしてきた委員会が機能していないのは、明白です。

質問16. 不正や研究倫理問題に関して、本学会の対応は十分だと思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	十分でなかった	研究機関や学会が、できる限り綿密な調査を行なって、公式な報告をした場合は、おおむね十分と言える。特に〇〇〇〇氏の件に関しては、〇大に頼らず、分子生物学会が自主的に調査しなければならない。〇〇氏を「若手教育ワーキンググループメンバーに任命した点を重く受けとめ」という会長の言葉が本心ならば、なおさらであろう。この件に関し分子生物学会の腰が引けているのは、より大きな疑惑をまねきかねない。〇〇氏の業績からして、学会が直接調査しないのは理解しかねる。共同研究者にも自覚が必要だろう。学会は責任を持って早急に対応すべきである。
※	十分でなかった	上述のとおり。学会として行動すべきときに、だんまりを決め込んでいた。これはまずい。
※	十分でなかった	研究倫理を語った本人の倫理が疑われている事態を考えると十分とはいえない。
※	十分でなかった	十分でなかったというよりも、失敗だったという方が正確だと思います。学会を代表して不正はダメだと言っていた本人が不正していたというのは、ジョークとしか思えません。あの人は腹を切ったのでしょうか？言葉の軽さにあきれざるばかりです。
※	十分でなかった	調査権限がない以上仕方ないこともあるが、もう少し目に見える形での対応が必要だった。
※	十分でなかった	演者を選ぶ前に身辺調査を行うべきだった。
※	十分でなかった	〇〇〇〇氏は、今回の件について分子生物学会で報告し、自らの立場と意見を総括すべきである。学会はそれを依頼する義務がある。
※	わからない	どこまでを求めているかで決まるのでよく分かりません。
※	わからない	何をもって十分といえるのかがわかりません。現在もなお〇〇大学のある元教授が不正で問題となっていますが、この学会はかつて彼をメンバーとして不正に関してワークショップを開いた記憶があります。もしそうであれば、その説明責任はどうするのでしょうか？いずれにしろ学会がこのような問題に首を突っ込むことは好ましいとは思っていません。
※	わからない	できることは限られているので、十分でも不十分ではありません。
※	わからない	日本分子生物学会どのような対応をしたか、一般的な会員には見えていない。
※	わからない	対応しすぎだったと感じます。
※	わからない	分子生物学会の会員で誰が何を不正しているか、十分に把握してないので。
※	わからない	学会で講演会をするのも良いが、現場のPIがハイIF主義で助成金を集めることに集中していれば、学会の活動など何の力もないと思います。それよりは、先生方を集めて、分子生物学会はハイIFや集めた助成金の金額ではなく、研究の中身で評価することを目指すべきであることを認識する方策を考える場を与えることが必要だと思う。また、志の高いシニア世代がそれを構築するために協力する必要があると思います。
※	わからない	ごちらかという行き過ぎているという印象。
※	わからない	学会の大会長や不正に関する委員が、不正で職を辞した例があることを考えると、何とも言い難い。
※	わからない	最近学会に参加していない
※	わからない	これまで分子生物学会がどこまでこの問題に取り組んできたのかほとんど理解してこなかったため、わからないとしか答えられないのが残念である。
※	わからない	学会としてどのような対応をされたのか知らないから。
※	わからない	正確に把握しておりません。申し訳ありません。
※	わからない	本学会の対応について詳細を知りません。
※	わからない	これまでの学会の対応を良く知らないので分かりません。
※	わからない	どのような活動をなされてきたか、残念ながら十分に知りません。
※	わからない	なにか効果はありましたか？
※	わからない	犯罪の取り締まりに「十分」を設けることは、おそらく不可能だから、永遠に「十分」ということにはならないだろう。ただ、今までの数々の企画は(〇教授の不幸な例で評価が著しく下がってしまったけれども)決して無駄だったとは思わないし、このアンケート自体も価値があると思う。根絶は無理である以上、その時々で、迅速に対応していくしかないです。
※	わからない	私が知らなかったただけだとは思いますが、本学会で何か具体的な取り組みがあったのでしょうか。

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	やるべきである	学術界が社会の一員である以上、社会問題に発展している研究不正と研究倫理の問題に取り組む姿勢を持つことは必然である。最初から内向きの態度で社会はおろか選手への説明まで怠ったプロ野球機構の轍を踏んではならない。
※	やるべきである	関係機関が真剣に取り組まないのであれば、学会が取り組む以外に真実を明らかにすることはできないように思います。
※	やるべきである	自己啓発は当然必要です。遅きに逸したと言っても過言ではないと思います。
※	やるべきである	研究分野を守るためにも、「ダメ、絶対」と啓発しなくてはいけないと思います。
※	やるべきである	学会以外に研究内容を評価できる組織がない と思います。
※	やるべきである	まっとうな人間であれば、行うべき。
※	やるべきである	不正自身、個人の問題に追うところが大きいのは確かである。しかし、「学会の年会」は権威付けして公表する場を与える行為であるため、学会員の不正に関して、責任が生じるのは当然である。学会として、こうした案件に対してワークショップなどで周知を図るのは、男女共同参画や若手研究者育成問題などと同様、学会員にとって「こちよ研究環境」を整えるための活動として当然の活動と思われる。
※	やるべきである	特に若手への教育のために。
※	やるべきである	最近の不正問題を学術研究に携われ研究者のみの問題と捉えることは問題があると思われる。研究の不祥事を通して、研究以外の分野においても海外に日本に対する不信感を持たせる一因にもなりうる。例えば、日本の製品は質が高い、日本の食の安心・安全、などは日本の技術だけでなく、国民性にも起因していると考えられる。その辺りの信頼に影響が及ぶぐらいの考えを研究者は持つべきである。
※	やるべきである	学会は「研究会」とは異なる責任がある。分子生物学会が「小さい研究会」から「大きな研究会」になったと思っているだけでは、いけないし、「学会」を創設した意義にも反するのではないか。「研究発表の場のみを提供するべき」ならば、学会とは別に研究会を行えばよい。当該者には、よく再考してほしい。
※	やるべきである	批判する人は問題認識が極めて低いと思います。
※	やるべきである	研究発表は事実と妥当な推論に基づくものと言う前提が守られなければ学会の存在意義はなくなるでしょう。
※	やるべきである	基本的には各教育研究機関が積極的に教育すべきと思われるが、機関を越えた共通認識は必要と思われるので、関係学会での取り組みは必要と思われる。
※	やるべきである	上にも書きましたように、不正な研究を発表として承認したり、それに授賞したりするのは学会の責任においてなされるものであるから。
※	やるべきである	研究不正の実例を参考に、何が問題でどのようにして研究不正が起こったのかを検証してほしい。それが、本当の意味での自浄能力の証明ではないか。
※	やるべきである	研究発表の場だけ提供すればいいというのは、昭和の考え方である。そういう態度は既に通用しない。これだけ大きな集団になれば、必然的に社会的な役割を自覚し、それを果たしていくのは当然である。
※	やるべきである	控えるべきという意見を述べている先生の論文を総チェックしたいと思いますので、ぜひ反対している先生の名前を教えてくださいたいところです。いずれ画像検索技術が進めば、自動的にピックアップされるのでしょうかね。
※	やるべきである	大学や省庁が、この問題に真剣に取り組もうとしていない現状としては、逆に学会がその良心を示しリーダーシップを発揮して欲しいと思います。○大への2回の質問状の送付は好感がもてます。
※	やるべきである	研究不正は研究のシステムの構造的問題であり、その問題を指摘、改善策を検討できるのは研究者の集団のみであるから。
※	やるべきである	不正が生ずる基盤を分析して、研究環境を整えるための提言をすることは重要だと思う。
※	やるべきである	常にやることで、研究不正はダメという意識を若者につけることにつながると思う。
※	やるべきである	学会員の関心のあることはやるべきでしょう。
※	やるべきである	「研究発表の場のみを提供するべきである」などの考えの者は科学の本質を理解していない。
※	やるべきである	研究不正、研究費不正、男女平等問題等は今後の学会を支える研究者の卵の方にも関連することなので学会で積極的に取り上げて啓蒙していくべきである。
※	やるべきである	不正に対して自浄能力の団体は社会的に認められない状況だと思われる。
※	やるべきである	他に適当な場がない現状では、貴重な機会だと思う。
※	やるべきである	やれることはどんどんやったらいいと思う。問題がタブー化することが一番怖い。
※	やるべきである	やるべきだと思います。
※	やるべきである	やる人がいれば、やる方がよいでしょう。私は、少なくともやりたくはありません。
※	ある程度はやるべきである	やるべきだとは思いますが、Q16に対してこれまで学会側の説明を聞いたことがない。Q16のような事態が生じたのは、シンポジストとして若手で業績を出している人間を選べばよいという安易な発想があったのではないか？やるのならば研究不正に対して専門性の高いシンポジウムを開催すべきだ。
※	ある程度はやるべきである	注意喚起のために有効であると思うから。

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	ある程度はやるべきである	研究不正を追及するのではなく、それが及ぼす悪影響について、周知することはしてもよいと思います。
※	ある程度はやるべきである	学会の本分が研究発表であるのは明白だが、その土台がおかしくなっているのに、それに対して何もしないというほうがおかしいのではないか。
※	ある程度はやるべきである	学会主催より、どこかのジャーナルが主催して欲しい。学会はあくまで研究に前向きであるべき。
※	ある程度はやるべきである	信頼できる方を中心にもう一度立て直しを図るべき。
※	ある程度はやるべきである	こういうのは不正だという教育も必要でしょうし、意味は十分あるかと思えます。
※	ある程度はやるべきである	教育的観点からやるのが望ましい
※	ある程度はやるべきである	そもそも学会がやるべきこととは思えない、研究不正をして出世しようとするような人物が分子生物学会に加入しないような風気が醸成されればと思う。ましてや、そのような人物に学会を利用されることを危惧する。
※	ある程度はやるべきである	学会が関与している学術雑誌の基本方針、審査基準などの改善を行い、そこでの基本姿勢を明確に表明しておくことは最低限やっておくべきであろうと思います。
※	ある程度はやるべきである	ある程度の企画があることは、啓蒙にはなる。そればかりだと学会の本来の意味を失うと思う。
※	ある程度はやるべきである	ワークショップで研究不正を咎めた方が不正行為に巻き込まれることがないようにご注意ください。
※	ある程度はやるべきである	問題を起こした人が学会員であった場合は、学会にも責任があるので何らかの対応をするべきだと考える。研究資金の多くは科研費(つまり税金)であるため、不正は一個人の責任にとどめるべきではない。学会としても不正を防ぐ努力をする必要がある。
※	ある程度はやるべきである	教育活動は積極的にすべきと思う。
※	ある程度はやるべきである	学会で不正を許さないという姿勢を見せる必要があると思う。
※	ある程度はやるべきである	そもそも何が不正なのか、といった知識の問題がある。そういった啓蒙活動はあってよい。
※	ある程度はやるべきである	一般論はいいですが、個別案件は取り上げるべきではないと思います。数が多すぎます。
※	ある程度はやるべきである	若い研究者は任期制もあり、いわゆる講座制のもと1人の教授について色々な事を教わる機会が減っている。分子生物学会は会員数も多い優れた研究者を育てる責務があると思う。したがって、研究倫理についての活動あるいは継続的な注意喚起は、我が国における研究不正防止に役立つのではないか。
※	ある程度はやるべきである	特定の事件があったから企画する、という姿勢ではなく、重要な問題なので企画する、という姿勢が、健全な若手育成のためには必要ではないでしょうか。
※	ある程度はやるべきである	啓蒙活動だけで良いように思う。先に述べたように、おかしな研究データはいずれ壁にぶち当たる。そのような研究者を探し告発することにエネルギーを注ぐよりも、今は埋もれているが磨けば宝石になるような研究、研究者を発掘することに力を入れた方が良い。そういった意味で、研究費や論文の採択の方法をより公平に行えるようなシステムを充実させる方が良いのではないか。不正な結果が疑われるような研究には、研究費を出さないようなシステムはできないのだろうか。
※	あまりやるべきでない	少しならあっても良いが、中心的な話題にするのはおかしい。上層部のアリバイ作りや会長のハク付けとして行われるのなら最低。
※	あまりやるべきでない	やるなら、しかるべき報酬を支払うべき。
※	あまりやるべきでない	年会で行う必要は無いのではないか。むしろ、データメなデータにだまされたい目を養うことが重要なのではないか。
※	あまりやるべきでない	全体としては、積極的な活動を希望するが、年会のような大きなイベントで開催するのはQ16同様に感じる。
※	あまりやるべきでない	研究発表の場にあまり相応しくない。時間をとりすぎないようにする。
※	あまりやるべきでない	研究発表に専念するの理にかなっており、それは間違った意見ではないと思う。学会がワークショップの場を設定することは、若手研究者の啓発としてはいいことだと思うが、何の権限も持たない学会が関わっても、端から見て、ただの自己満足にしか見えません。
※	あまりやるべきでない	これは 人間性の問題なので いくら不正は悪いことだと綺麗ごとを言っても回避されるものでない。別の組織を作って もっと不正に至る心理的問題などを 専門家とともに科学的に取り上げるべきである。そうしたことに必ずしも専門的知識のない科学者が集まっても素人意見しか出てこないと思う。
※	あまりやるべきでない	学会は学術交換の場であり、あまり時間や人を割くのは避けた方が良いのでは。予防効果の秘策等があれば別ですが。
※	あまりやるべきでない	現状では世間を騒がせる不正事件が起きた時に、学会が無関心ではないことを示すためだけに、形式的にワークショップを行っているように見えてしまう。本当に倫理の問題であるなら、ワークショップを開いたことで、はたと気づくような人はいないだろう。

質問17. 年会における研究不正対応の企画について、どう思いますか？

回答者番号	回答	選んだ理由やご意見
※	十分でなかった	学会としては、学術的な検証に基づいた意見を表明する役割が求められると思うが、独立性も含め、その機能を担うだけの人的・金銭的なしきみを現状の組織では持ち合わせていない。
※	やるべきでない	学会は学問の場であり、倫理問題教育は個々の研究機関で実施するものであろう。
※	やるべきでない	名前を出してそれぞれの方の意見を出してください。いずれにしろ若い人が脱会することを危惧しています。
※	やるべきでない	学会は学問を論議する神聖な場です。なので、>研究不正対応等の企画のような汚れた企画は別に行うべきと思います。
※	やるべきでない	やるとしても、学会はそういう集まりをしたい人に場所を提供するだけでよい。年会での対応が研究不正を抑止するとは思わない。
※	やるべきでない	ある程度はやるべき。本来、日本学術会議や総合科学技術会議がイニシアティブをとるべきであるが、機能しているようには見えない。とすると現状研究不正に対応する組織がないといえる。よって、研究者教育&啓発(特にシニア研究者に対し)の目的のためにも実施する必要がある。文科省に対しても示す必要がある。
※	やるべきでない	なぜ、今年なのか？去年の企画はなんだったのか？執行部として、その反省はないのか？遅すぎる。とにかく、執行部がどのように考えているのか？つまり学会としてどのように考えているのかを、「社会に向かって」「学会として」発信して欲しい。現状は、学会員として、とても恥ずかしい。
※	やるべきでない	以前に担当した人が張本人だった。限界があるのは明らか。
※	わからない	学会の中心となっている役員が、不正に関わっていたケースもあるわけです。学会がおこなうのは違和感があります。
※	わからない	内容によると思う。建設的な内容なら悪くないが、ネガティブな報告や糾弾、あるいは通り一遍なものなら、わざわざ場所・時間を割く意味が見つけられない。
※	わからない	そこから何が得られるかが問題
※	わからない	何を行なって、参加者に何を期待するかによると思う。
※	わからない	先ほども書きましたが、本当に必要な人に対して行動しているのか疑問です。
※	わからない	Q11、Q16にコメントしている分です。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由
※	若手の倫理教育	今すぐに不正をゼロにできなくても、若手の倫理教育をすることによって、将来はゼロに近付けることも可能ではないでしょうか。
※	PIの倫理教育	学会が対応すべきことではないと思うが、強いて言えばPIの教育であろう。
※	PIの倫理教育	一度には無理なので、最重要課題のPIの倫理教育だと思います。PIがしっかりすれば、若手はその背中を見ます。
※	PIの倫理教育	まずは、PIがどうあるべきか、何をメンバーに教えるべきか、どうチェックすべきかを知らなくては、お話にならないので。
※	PIの倫理教育	研究不正はPIの個人的な資質によって引き起こされる。
※	PIの倫理教育	研究室から出される研究成果の最高責任者として、研究不正の防止にとりくむべき責務があるのはPIであるから。
※	研究不正の背景	予算の配分の校正性の確保など
※	研究不正の背景	多くの場合、PIであれば研究費の問題が、ポスドクや大学院生であればポジション獲得の問題が、不正の誘惑に駆られる根本原因だと思いますので、この観点から掘り下げてみて頂ければ幸いです。
※	研究不正の背景	Q17の項で記したように企画する意味はない。企画するなら不正の背景をきちっと分析する。歴史的に、倫理的に、また経済的に、さらには現在の研究者雇用システムの観点から。ワークショップでこれらを効率よく議論できるとは思いませんが、。
※	研究不正の背景	PIが身につまされるような話し合いをするべきだと思うが、ワークショップが効果的な方法だとは思わない。
※	研究不正の背景	ワークショップで「教育」は無意味だと思うので止めて欲しい。不正を行っている人、確信犯的に不正をしている人が、自由参加のワークショップに出席して改心するなんてあり得ない。全くの時間と労力の無駄。
※	研究不正への対応策	先にもあげたが、不正とはモラルであり、これは小学生でも解るべき。教育してどうなるものでもない。不正は厳罰に処せられると言うポイントを言えば良いと思う。
※	研究不正への対応策	不正対策を強化しない限り、教育などやっても意味は無い、彼らは確信犯なのだから。
※	研究不正への対応策	厳罰に処されることを強調することが大切だと思います。
※	その他	例えば、若手の倫理教育までを学会がやるのでしょうか？極めて疑問です。
※	その他	過度に取り上げる必要なし。
※	その他	頼むから、去年の二の舞はやらないでほしい。「社会に対して」「学会としてのメッセージの発信」を行うべきである。それができない企画をいくらやっても、意味がない。学会として、行動せよ。
※	その他	これらのことは、ほとんど大学や研究機関で行なっているのでは。あえて学会で行うことに、特別な意味があるとは思えない。特別な情報が提供されるのなら別だが、。
※	その他	論理的に正しく組み立てられ、正確に実験を行い、適切に解釈しているのなら、時流に乗った説に沿ってなくても、どうどうと主張すべきであることを学会としても支持するべきではないだろうか。不正の影には、正しいことをやっても評価が低いということがある。もちろん、アイデア、技量、論理性などが足りないと重要な結果は得にくいものであるが、それでも不正を犯すよりは遥かに科学のために貢献するという誇りが持てるという認識が浸透していく必要があるのではないだろうか。
※	その他	若手の倫理教育は、学部学生、大学院生の教育に係る大学で基本的に指導すべき内容だと思います。その教育の一環で、「研究不正の背景」等についてもきちんと学習が行われ、このことが身に付いていけば良いはずですが、...。その意味で「Q13」に対してコメントしたことが関係すると思います。
※	その他	ORIIに近い人やOBに講演してもらおう。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景	研究の方向性に関する倫理教育と、不正に対する倫理教育はまったく別ものなので、一緒にしたくないことが望まれる。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景	対応策の前にまず、研究不正や研究倫理の問題が学術界にとって極めて深刻な問題ということに対して、学会員の意識を集約してゆくことが先決であろう。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景	若手PIの教育が第1。
※	若手の倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	学会としては限界があるので、あまり深く考えてはけません。学会の本来の姿は、正しく素晴らしい結果が、いかに科学の進歩に貢献するかを知らしめることです。不正や誤謬が科学の進歩を遅らせることを理解させることも重要なので、抽象的ではなく具体的な偽造・捏造データを示し、これらがいかに害をもたらすかを教えることは意味があるかもしれない。しかし、これはかなり幼稚な感じがする。PIを選ぶのは大学や研究所ですので、責任はそこにある。PIにふさわしい人を選ぶ責任がある。PIにふさわしい人を見抜く必要があります。教育できるものではないでしょう。PIの教育を、学会にできるとは思えません。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者番号	回答	選んだ理由
※	若手の倫理教育/研究不正への対応策/その他	若手には何をするのがまずいのかは教えた方がよい。不正するPIは何をしようとまずいかを知っているはずなので、教育は意味がない。むしろどうすればされるか、どのような罰があるかを知ってもらった方がよい。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	若手が行う場合もあるが、大学の偉いヒトが行うこともある。若い人への教育でなくて、偉いヒトに教育してほしい。偉いヒトに鈴をつけるのが難しいので。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	倫理だけでなくどうしておこるのか、どうすれば減らすことができるのかを考えないと不正は減らない。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育	若手、PIともに倫理教育が必要と思われる。
※	若手の倫理教育/研究不正の背景	データの取扱いについて、教育するのはよいと思います。意図した不正は防ぐ事は困難ですが、意図せずに結果的に研究不正と認定される行為をしてしまうことは防ぐべきです。業績至上主義のせい、きちんとトレーニングされたいない研究者がPIになってしまうことも問題の一部だと思います。
※	若手の倫理教育/研究不正の背景	学会は、取り締まりよりも人材育成に重きを置くべきだと思いますので、不正を未然に防ぐ取り組みを行うことを希望します。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	若手はPIを見ております。なのでPI(評価者)の意識を変えないとダメかと思います。
※	PIの倫理教育/研究不正の背景	こういう問題は、結局はPI(若手に対する直接の研究教育者)の問題であることを明確にして、焦点を絞って行う。
※	PIの倫理教育/研究不正への対応策	PIが自ら不定に対して厳しく律する態度を示すことが重要。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	大学院生やPIへの研究倫理教育自体は行っている大学院も多く、その内容などを吟味すること自体にあまり意義は感じない。基本的には不正の背景、その予防措置、起こった時にどうするか(多分これがかつ最も重要かつ負担の大きなこと)、ではないか?不正が起こったとき(大概はグレーゾーン)に、その教員・研究員をどう処遇するかは、大学で対処することは極めて困難な状況にあり、法的制度などを整備しないと対処不可能だと感じる。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	特定の人が対象になる問題ではなく、すべてを対象として行われるものがよいと思います。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	個人の教育を行っても解決にはならないだろう。どのような状況でも、一定頻度で個人的不正は起こる。しかし、昨今のそれはそのような個人問題を越えた、システムの問題だと思う。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	倫理教育がどのように可能なのか、意味があるのか、疑問なので、上記を選びました。人間の倫理は、大人になってかえられるものでしょうか?
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	頭ごなしに倫理教育はあまりよくないのかもしれない。悪いことはだれでもわかっているので、その背景と対策を議論したほうがよい。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	まずは、誰が教育され、何が教育されるべきかを研究者側が認識する必要がある。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	たかだか数日のワークショップで倫理教育ができるとは甘すぎる。だれもが不正は悪いことだとは知っている。それでも不正は起きている。どうして不正が起こるのか どうしたらそれを避けることができるかを 犯罪心理学者などを交えて考えていくべきだと思う。繰り返すが そうしたこと素人の科学者だけで話し合っても限界がある。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	何故不正をしたのか、不正をしたらどうなるのか、を知らしめることが大事。
※	研究不正の背景/研究不正への対応策	不正をしてはならないという倫理は言うまでも無いことなので、どういう経緯あるいは誘惑があつて不正を行ってしまったのか、そしてそれに対してどう対応すべきかが大事だと思います。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	おざなりで済ませないように、過去の経験者の話を聞かせてほしい。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	自明
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	若手は古手の行動を見て育ちます。古手をしっかりさせない限り、問題は解決しないと思う。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	研究不正に限らず、幅広く研究活動に対する事後評価を重視する事でしょうか。不正や論文の問題点は時間が経ってから見つかるものであり、発表直後のインパクトだけの評価だと事後評価へのインセンティブが働きません。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者 番号	回答	選んだ理由
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	データや実験ノートの付け方, 管理方法などの基本的な推奨指針が出せればよいと思う。文科省のガイドラインでは不正と言われた場合, それを覆す証拠がないものは同様に不正となるので, データの紛失などがないようにすること, 論文投稿には生データを必ず確認できるようにしておくことなど。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策	やれることはやっただけいい, という意味ですべてつけたが, 「これをやれば大丈夫」と思っているわけではありません。いずれにしても, 個人の倫理観に訴えることの重要性と限界を, どのように折り合いをつけるのが私には見えない問題なので, そのあたりを教えていただける機会があればよいと思う。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/研究不正への対応策/その他	IFの高いジャーナルが不正の責任の重要な一端を担っているため。
※	若手の倫理教育/PIの倫理教育/研究不正の背景/その他	若手、PIに限らず、倫理教育は必要。

質問18. 第36回年会で取り上げるべき観点を以下からお選びください。 <複数回答可>

回答者 番号	その他記述
※	若手よりシニアの教育は大丈夫でしょうか。たとえば、本当にシニアPIは自分の研究室から出る論文のデータの生データをチェックしているのでしょうか？
※	研究不正が起きた場合の調査権を持つ大学の対応
※	不正対策よりも、科学者はどうあるべきかを啓蒙するべき。科学者のあるべき姿を理解すれば、捏造などは思いも付かないことになるはず。
※	学会会員の年齢でワークショップをやっても、「こんなことをやるとあぶないね」という程度の効果しかないでしょう。小学校低学年からの教育の積み重ねでしか良くはならないでしょう。
※	意識的な不正ではなくても、きちんとしたコントロール実験をしていない、都合の良いデータのみを使う、再現性をきちんと確認しないなどの問題も多くあるのではないかと思います。それらについては、教育によって改善する可能性があると思う。
※	〇〇〇〇氏の件に関して学会としての具体的対応を議論したらどうか。
※	対策をとるためには、原因を把握することが必要。
※	研究者雇用状況のポストドクを含む若手研究所の雇用状況と将来
※	ORIのような第三者機関の設立の必要性。設立する場合にどのようなものであるべきか、という議論。
※	匿名で「論文のコピペ画像」や「エラーバーが妙にそろったグラフ」を募集して、それを皆で鑑賞するような企画はいかがでしょうか？
※	不正を生みにくい評価方法について
※	研究不正後の対応策(どのようなペナルティーを与えるべきか、どのようなペナルティーなら効果がありかつ合法的に安心して行えるか)
※	事例集。事例を知ることは、境界を理解することでもあり、不正防止のために重要だと思います。

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者番号	回答	選んだ理由
※	学会の責任者	純粋に科学をするためのPIや評価者の意識改革をどのようにするかを学会の責任者が企画し、議論して学会のみならず世の中に見解を公表すべきと思う。予算が削られそうな時だけ、パブリックコメントをするの身勝手かと思う。研究環境をよくすることにもっと貢献する方策を考える必要がある。すくなくとも、分子生物学会はその責務があると思います。
※	学会の責任者	学会としての姿勢を示す必要がある。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	不正問題を明らかにすることで、再発予防をはかるため。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	実際のところ、どうなのかを知りたい。個人的には、PIばかりのせいではなくメンバーの責任も大きいと思う。もちろん捏造を見抜けなかった責任はなるが、本気で捏造されたら、果たしてPIは見抜けるのだろうか。その辺のことも実際の事例の調査から聞いてみたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	今回の〇〇論文問題での〇〇大学の対応が遅過ぎるのが、最大の問題点である。〇〇大学の責任者がその対応についての十分な説明が必要であろう。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	どんな調査をして、何がわかったのか。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	調査の実態、どのような困難があるか、その結果どのように判断し対応したか、お聞きしたいと思います。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	1、3、4はむしろ、話を聞きたくないです。1は、学会は中立を維持すべきなのでやるべきでない。3はトップジャーナルは不正論文を掲載することで利益を上げることもあるので、ここから意見を聞く必要なし。4も、研究費を提供している側ですし、利害があるので、話を聞く必要なし。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	調査をするうえで生じた問題、どこまで踏み込んだ調査が実行可能だったのか、または困難だった点など実際の現場での問題点を教えて頂きたい。例えば、海外で行っている様な踏み込んだ調査を実行できているのか否か。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	やはり不正への調査を実際におこなった関係者の話を聴くことが必要と思う。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	どのような調査が行われたのかについて具体的に知りたいから。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	何でこの項目は複数回答できないのか？
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	結局、経緯から学ぶしか無いかもしれません。3流週刊誌みたいですが。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	研究機関での調査の有効性と限界について明確な見解を聞きたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	トップジャーナルの編集者も含んで欲しい。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	なぜ調査に時間がかかるか、ぜひ聞きたい。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	まず、背景を理解すべきだと思う。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	個人が特定されるので話題が限定されるが、現場での判断の基準、その基準に到達するための意見交換、など実際体験したことがないと分かりづらいので。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	症例報告という意味で、調査関係者をあげました。今回の話題の事件の調査関係者である必要はありません。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	2は、個別の情報の開示を求めないなど約束しないとむづかしいかもしれない。4の意見も是非聞いてみたいものだが。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	長い時間と労力をかけて調査した方は、研究不正に関する総合的な観点を形成されていると推測する。現場を見てきた内容は極めて貴重とおもわれる。しかし、関係者は守秘義務あり、口外することができない面もあり、難しいであろう。
※	不正があった研究機関の調査関係者（責任者）	繰り返しますが、学会にはまったく責任はない。責任を持たせるべきではないと思う。
※	トップジャーナルの編集者	客観的な意見を持ち合わせる人がいいと思うから。
※	トップジャーナルの編集者	不正の見抜き方あるいは対応策など
※	トップジャーナルの編集者	Retraction相当のものをなぜcorrectionで済ますのか、理由を開示して欲しい。
※	トップジャーナルの編集者	「Natureの論文の半分くらいは信じないほうがいいよ」と昔、先輩に言われたことがありました。実際、おもしろそうな論文のかなりのものが、その後消えていきました。科学の世界ではこれは半分以上必然的な現象とも思われます。トップジャーナルの編集機関の人々は、その辺をどのように考えているか聞いてみたいと思います。

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者番号	回答	選んだ理由
※	トップジャーナルの編集者	インパクトファクターの高いジャーナルにおいて、データの奇麗さ、ストーリー性が過度に要求されるケースがある。ある程度は必要なことだが、ジャーナル(審査員?)のこのような過度の要求に対し、acceptをしてもらいたいが故の不正も多数あると思われる。その背景として、ジャーナル同士の評価(点数)競争もあるのでは。この辺りに対しての意見を聞いてみたい。
※	トップジャーナルの編集者	不正の多くはトップジャーナルで起きているので、編集者の見解を聞きたい。
※	トップジャーナルの編集者	特に、Nature. 不正に取り組むしめしつつも、具体的な論文の撤回となると消極的であり、論文受理後の、大量の修正を認めているという自己矛盾を抱えているので。〇〇論文で訂正にすらすら造があったことすら見抜けなかった危機意識のなさ
※	トップジャーナルの編集者	1から4までそれぞれ適当と思われるが、3に関しては機会が少ないので今回聞きたい。
※	トップジャーナルの編集者	雑誌に載ることが最終目的なので、編集者からの意見を聞いて見たい。
※	トップジャーナルの編集者	review段階までできるかぎり見ることはできないのか。
※	トップジャーナルの編集者	トップジャーナルが査読にて見抜けない点を共通して把握しておくべきかも知れない。
※	研究費助成機関	不正の温床であり、不正を誘発する環境をつくっているから。彼等の権限内で実施できることも多いが、助成機関自体に隠蔽体質があるから。
※	研究費助成機関	4を選択しましたがジャーナル編集者、海外の事例の紹介もあると良いです。
※	研究費助成機関	研究費を出している側の対応が最も重要だと考えるから。
※	その他	日本基準では駄目だと思います。グローバルな視点で話せる方。例えば、ORIの方。
※	その他	学会がそこまで踏み込む必要はありませんので、ワークショップは中止すべきです。暇な学会理事がいるのかもしれないと懐疑的になりました。
※	その他	過度に取り上げる必要なし。
※	その他	研究者として復活できないのなら、せめて体験を語ることで学界に貢献してほしい。
※	その他	研究費配分方法を一部変えれば(上記)不正は減ると思いますが、これについてどう考えているか、立法及び行政の考え方を聞いてみたいと思っています。
※	その他	小職が職を探していた時、〇〇先生に相談したところ、「職(ポジション)なんてなくていいんですよ。自分のやりたい研究ができることが大事なんですよ。」といわれ、その時は本当の意味がわからなかったが、後になってその言葉の意味を実体験として理解することができた。〇〇博士も、「流行を追う人にとっては、研究は職業であり立身出世の手段にすぎない」という名言があり、〇〇先生も以前免疫学会のホームページで流行を追う非科学者を糾弾されていた。この世代の科学者の考えを聞いてみたいと思う。
※	その他	裁判等の問題もあり、調査関係者などは適切でないと思う。その他の立場の人間の話しを聞いても何の足しにもならないと思う。科学者としては「捏造を疑われている当事者」に直接聞いて何が必要なのかなど考えてみたいというのが本音である。
※	その他	成功者は、いろんなことが分かっている。
※	その他	基礎科学に何が期待されているのか、それを推進するためにどのような人材や才能が使われるべきか、いったんその実力が認められたらその研究者に託する覚悟があるのか、それをどう決めればよいのか、科学と社会の関係はどのようにあるべきか、先進諸国の中で基礎科学に最も甘い予算配分がなされているが、世界のトップを取れていない状況にどのように申し開きするのか、分子生物学会で発表される膨大な研究に用いられた費用に見合った分だけ、この学問は進展していると言えるのか、それを語る相手として
※	その他	専門家の意見が大切である。学会の責任者も ジャーナルの編集者も そうしたことには専門でない。ただ謝ったり 素人的な批判をするだけになる。
※	その他	これらすべての方ですね。学会でやるならそれくらいしないと、参加する人はかなり限られるのでは?ちなみに、私自身は参加しないと思う。
※	その他	上記4項目、いずれも大切なためどれか1つとは選べない。
※	その他	公的機関であれば、財源は税金だし、企業であれば、商品のエンドユーザーのお金なので、納税者であり、商品の購入者である市民(研究者もそうだが)も意見を述べる必要がある。
※	その他	不正を行った理由と背景(何故そうしなけりならなかったか)について聴きたい。
※	その他	特に現役の〇〇教授は話をしてもらいたい。できないなら教授をやめるべき。
※	その他	一番情報がないから。
※	その他	教育講演として法曹界の方にもお願いするというのはいかがでしょうか。

質問19. 第36回年会でのワークショップで、討論するのが適当と思われる相手をお選びください。

回答者 番号	その他記述
※	難しいでしょうが、不正があったとされる研究者に近い研究者(実情を有る程度理解している人)
※	難しいですが、研究不正の定義、現状を世界的に把握しておられる方。
※	あらゆる関係者が考える必要があると思う
※	何も聞きたいとは思いません。
※	不正を行った本人。
※	科学政策にかかわる政府関係者
※	一般のPI、ポスドク、大学院生
※	研究を職業としていない研究者。例えば、〇〇〇〇大理学部名誉教授、〇〇〇〇大医学部名誉教授。
※	捏造を疑われている当事者。
※	どれもあまり参考にならない。
※	質問の意味がわかりませんでした。
※	〇〇〇〇先生、〇〇〇〇先生など。
※	納税者
※	犯罪心理学者
※	不正を行った人の座談会
※	2、3、4の3者すべて
※	上記4項目すべて
※	市民
※	倫理委員が不正への関与を指摘されている例もあり、誰が話しても信用されない。研究者をいかに追い込まないかというような話が出来ればよいですね。
※	不正を行った本人
※	〇〇〇〇氏、〇〇〇〇氏、〇〇氏、など
※	不正を行った当事者
※	不正疑惑の渦中にある(あった)方
※	ねつ造した本人
※	不正した本人

質問20. 第36回年会のワークショップの内容に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	問題の背景について議論を深め意識を共有することができれば前進と思います。今回の調査結果に基づき学会関係者で論点を整理したうえで、講演、ないしはパネルディスカッションの具体的な企画を作っていただければ幸いです。
※	今後の研究活動がよりよいものになるようなワークショップになるとよいと思います。
※	研究人生における不正は、な——にも楽しくないと思うのだが、どうもそう思わない人がいるのは、とても不思議です。ずるした、楽しいか？
※	今回の開催は、理事の中でも賛成と反対で割れているのではないかと推測します。これまでの議論を学会HPなどで名前を入れて明確にしてください。判断しかねます。
※	自然科学とくに生命科学においては結論を導くのにすべてが整合性がとれたデータが得られるわけではない。生命現象を理解することはそれほど簡単ではない。ところが論文として採択されるためにはとくに有名なジャーナルにおいては完全に整合性のとれたデータでなければ掲載にまでは至らないのが現実である。本来なら「得られたデータのこの部分は自分たちの結論には矛盾しており、さらなる検討が必要である。」といった真摯な議論があつてしかるべきであるが、このような論調は現実にはほとんどみられない。このことが不正を冒してまで論文を掲載させようとする圧力になっている点もぜひ検討していただきたい。
※	研究不正は大きな問題であるものの、かと言って、興味本位的な取り上げ方をしては、若者の教育には繋がらないので、節度のある取り上げ方を望みます。
※	予算の偏在の原因を探るべきだと思います。私自身は研究の不正に関わったことはありませんが、誘惑に狩られることはあります。なぜなら、自分の基盤的な研究歴を捨てて、いわゆる今どきなテーマに掛け替えることにより、予算獲得ができるのであれば…、捏造とまでは言いませんが、都合よいデータを引用したくなります。残念ながら気が小さいので結果を想像すると諦めてしまいますが…過程での葛藤は想像できます。日本では、できあがった研究への予算配分を重点配分としてるように思えますが、本来はシーズを見つけて重点配分すべきかと思えます。でき上がった研究には、企業あるいは民間ファンドなどからの予算はつけやすいので、むしろ、科研費などの予算措置は必要ないと思います。このあたりも学会として毅然とした意見を述べて頂きたくお願い致します。政治家にこれを理解させることは無理だと思いますので…（民主党の時の仕分けで、世界一の理由の説明できなかつたトップは必要ありません）。
※	ワークショップ不要と考えます。
※	「研究を自分の出世、欲望を満たすために利用するような、倫理観のない人間は研究者になるべきではない。」といった、全く役には立たないであろう。研究不正を見ぬく目をもった専門機関の設置、研究不正を告発しやすい体制の樹立、研究不正への厳正な対応（個人と所属機関へ）があつて、はじめて現在の研究制度が保たれると考える。
※	分子生物学という領域外でも問題になっているはずで、そうした例も引きながら、対応を考えるべき。同じ人間がやることなので。性善説に戻れるための社会を構築してほしい。
※	疑義を持たれている方に本当の話を聞かせてもらったらいのでは？大学の調査は進まないのでは、間違いなら間違いで仕方ないではないでしょうか？今後研究者をどう育てるかが問題。反省しているなら、反省の弁を聞いてもよいのでは？○教授にも登場していただいて、率直な意見を聞くのもよいのではないのでしょうか？
※	この欄に書くべきかどうかわかりませんが、Q7の質問の「対応」の意図がわかりません。
※	学会としてどうこの問題を扱うかということよりも、どこまでが良くて、どこが悪いのかという、実際に即した教育的なものが望ましいと思います。
※	科学を立身出世の道具と考える偽科学者が分子生物学会に多数潜伏している現状では難しいのかもしれませんが、科学者と偽科学者が対決するワークショップ（表向きのタイトルは、「科学者は職業か？——研究者の立身出世の花道——」）が開かれれば、是非参加して、似非科学者を退治したいと思います。
※	ワークショップに特に意見はありませんが、事由記載欄の枠の大きさにたいして、制限字数が少なく、かつ、文字カウンターが無いのでどれだけ書いて良いかが判りませんし、いくら削れば良いかも判りません。後で怖じ数オーバーと言われても困るので、次回からはもっとユーザーフレンドリーなアンケートフォーマットにして頂けるよう、お願いします。
※	取りまとめお疲れさまです。頑張ってください。
※	明らかな捏造を働いても、実際には大学機関は無力であり、裁判をたてられて敗訴するのがオチである。なぜかという、裁判官が捏造に対して無知であるから。明らかな捏造であるのにも関わらず、大学側が敗訴した例として「捏造した本人に、データ再提出の機会を与えないで、一方的に処罰した」という判決事例があつた。要するに捏造は改竄ではなく、改めて正しいデータを出せば良いのである、という裁判官の判断である。なので、この国では、捏造は裁かれないのです。
※	以前、捏造で○大を解雇された教授のことが話題になった時に、NHKが番組を組み、アンケートでアメリカの研究者の1/3？（数字は不確かだが、驚くほどの割合が不正経験あり）に不正経験ありとの報道をしていた。アメリカの点数主義（他民族なのでこれが一番公平との考え）の一つの結果と考えられる。昨今のことは前向きに捉え、日本において根本的にサイエンスの本質を考えるよいチャンスと考えるべきである。
※	「研究倫理や論文不正問題に関するワークショップを以前より踏み込んだ形で行う予定」とありますが、分子生物学会の年会であり重点をおくことではない。基礎研究の重要性を確認し合い社会に向けてアピールすることが重要。
※	お疲れ様です
※	○○○○氏の件に関して学会としての具体的な対応を議論したらどうか。○○○○氏が執筆した、不正を防ぐための著作（蛋白質核酸酵素）は、いまだ分子生物学会のホームページにでているが、これは学会としてのどのように考えているのだろうか。このような問題に正面から立ち向かう姿勢を保ってほしい。

質問20. 第36回年会のワークショップの内容に関してのご要望やご意見

回答者番号	ご要望やご意見
※	企画の目的がわからない。「話題性があるからやりましょう」程度の準備でおこなったら、去年と同じ「むごい状況」になってしまう。既に述べたように、一昨年来の学会の対応は、「極めて見苦しい」。トップで議論をしていないはずはないのだが、外からはそれが全く見えない。開かれた学会との印象を持っていたが、極めて閉鎖的な学会であることを社会に示してしまった。学会の発足以来の最大の危機ともいえる時に、最も学会のトップの役割が必要とされた時に、「判断」をできなかった事は、トップの資質がないことを明確に示してしまった。繰り返すが、行動すべきときにその判断をできず、なにもしなかった。その事実は重い。できるだけ早く交替すべきである。この事実にとりあえずの学会員、特に希望に燃えた若い学会員の失望を買ったことか。このアンケートも、誰に対して要望するのか、不明朗である。学会のトップにお願いしたい。今は大切な時なので、そして、この問題は学問（研究者）と社会を結びとても微妙で大切な問題なので、「学会としての戦略を持って」「事に当たって欲しい」「社会に対して、研究者を代表する学会として、発信して欲しい」。分子生物学会とともに歩んできた一学会員の切なる希望である。
※	この問題に対して分子生物学会が積極的姿勢をとる事は重要です。現在進行の問題の糾弾とは切り離して、未来志向議論を行い学会活動と学会からの提言に反映させて行ってほしいと思います。
※	1. 論文等では研究者が得たデータのうち説明がつかないデータは示されないのが常である。良識のある研究者なら、考察かどこかで少し記述することもあるが、reviewerに突っ込まれることを恐れてお蔵入りになってしまうことも多いのではないか。これはある意味隠蔽ともとらえられるが、どこまでを不正と考えるべきなのか？2. 以前peer-reviewをした論文原稿で、新たに実験行っているがどうみても以前の論文のデータの焼き直しで、これらが結果のかなりを占め、本当に新しい結果はほんの少し、というようなものがあり、しかもfull paperとして出てきた。さすがにこれはrejectしたが、以前の研究からのつながりを考えれば、結果の中に焼き直しが含まれていることは仕方ないとも思われる。どこまでが許容されるのであろうか？このようなところ議論をお願いできればと思います。要は不正の基準をどこにするかです。
※	上述したように、大学や研究機関で行なっている教育セミナーのようなものに毛が生えた程度のものであれば、やらないほうが良いと思う。突き放した言い方になるが、どの世の中でも犯罪がなくならないと同じように、人に欲がある以上研究の不正もなくなるのでは。もし、日本の研究者あたりの不正件数が、ほかと比べて多いというようなことがあるのだとしたら、国内の学会などが、その理由、解決方法などを検討すべきと考えます。
※	研究不正の防止のために、日本の研究体制で何が問題でどのように改善していくべきか建設的な意見が聞きたい。現在の特許偏重で基礎研究軽視の状況は、嘆かましい問題だ。
※	本学会の取り組みについては不勉強で良く把握できていませんが、学会の役割を会員で議論することは重要と思います。ぜひ不正防止の取り組みを積極的に行ってほしいと思います。
※	あまりいろいろなことを考えずに、過激にやって欲しい。膿を出し切って、正しい科学の再生のために努力して欲しい。
※	結局、お金やポジションといったことに興味が移っている人が不正を行っている、ということでしょうか。とすれば、業績評価や研究資金の配分を研究業績では行わない、とすれば良いのですが、それに代わるものも無い訳ですから。とすれば、公開裁判のような方式しか無いのかもしれない。ネット上の告発のような。
※	自転車操業的研究環境の問題点について（任期制を含む）
※	より多くの方々が参加できること、内容が後からでも見られるように公開されることを望みます。
※	特にありません。
※	不正を防ぐ一般的教育は学会がすべき。ただ、調査的なことを始めると消耗が激しいので学会本来の目的がぼやけて来ます。
※	研究の競争主義、国民への説明責任、目に見えて役に立つ研究には投資、無駄をなくす人員整理、大学整理、yes, noでデジタル的に効率を判断して切り捨てる、このような状況では、よいサイエンスは生まれません。無駄と思われる裾野の広い研究があつてこそ、新たな発見も出てくると思います。趣味でも純粋に研究をしていたら食べては行ける(中学高校の教員程度の給与が支給される)というような環境を整備できないのであれば、“偉そうに”科学立国(この意味では技術は入れるべきではない)などと言わないでほしい、と国や現在の研究推進のトップに言いたい。
※	不正そのものはどんな世界にもあり、根絶もできないものと考えている。「不正事件」への対処よりも、時流に乗ったきれいなストーリーにならないと論文が掲載されないというような風潮をおおいに危惧している。不正かもしれない怪しい実験結果が論文に載ったりすると(その論文の7-8割は正しく、優れているとしても)、それが証拠として一人歩きをして、本当の実験結果が発表しにくくなっている。本当の意味で学問を進めるためには、一見説明できないような実験結果の中に重要な仕組みが隠れていることを見いだしていくことが大切であることについて共通認識を持ちたい。
※	科学は万人の前に平等なので、研究者間の地位による圧力をどのように減らすか考えて行く場にして欲しい。全て研究者は好きでなっているはずなので、何が切っ掛けでそのような不正・ねつ造を生むようになるのかを共有できればうれしい。
※	上に記したように、本邦では一部の研究者を覗いて、研究環境が悪化してきております。ポジションと研究費の減少は致命的で、ポストク問題を始めとする多くのひずみを生み出しています。こうしたひずみに生きる人達がポジション、研究費を始めとする生存権を獲得するために不正を行うと考えています。従って、研究不正に対する教育や厳罰化だけでは問題は解決しないと思います。地方大学を始めとして研究環境を向上させるべく学会は活動しなければならぬと思います。自己浄化努力のアピールとしては良いのですが、研究不正に対する倫理教育の様な後ろ向きな話題のみならず、どうしたら現状の研究環境を良くしていけるかといった前向きな話題もお願いしたいと思います。

質問20. 第36回年会のワークショップの内容に関してのご要望やご意見

回答者 番号	ご要望やご意見
※	人の心を持たぬ人が、研究者の中にも潜んでいます。倫理観の欠如した人にどう対応すればよいのか、プライバシーの問題もあるので難しいと思いますが、方策を考えてもらえるとありがたいです。また、予算配分について、特定の流行り分野(iPSなど)に極端な割り振りがなされているように感じます。分子生物学会のような大きな学会は特に積極的に予算配分への提言を行い、結果についての評価も示してゆくべきではないかと思えます。
※	特にありませんが、例年ほとんど同じ方達がオーガナイズし、同じような内容の企画が続いている分に関しては、精査していただきたいと思えます。そうすることで開催日程が3日以内にコンパクトになる方が良いと思えます。
※	〇〇〇さんや〇〇〇さんがネット上で指摘されている様々な論文の不正を、改めて会場で映写しながら皆で検証する企画はどうでしょうか。
※	前述のように、不正は構造的なものだと思っているので、超厳罰化以外は、前提となる研究スタイルそのものを変化させない限り、劇的な処方箋はおそらく描けない。両方ともかなり難しいと思うので、とにかく地道に対症療法を続けていくしかないと思う。
※	全体的には日本人の科学者はあまり恵まれた環境でないにもかかわらず、創意工夫して研究を行っていると思っています。今の日本社会は、科学者に何を求めているのでしょうか。公務員がマスコミから袋だたきにあっているように、(一部の例を挙げて)科学者もたたかれすぎているように思えます。英国のサッチャー元首相が、金持ちを優遇した経済政策に対するマスコミの批判に対して「金持ちを貧乏人にしたからといって、貧乏人が豊になるわけでも、ましてや国が栄えるわけではない。」と反論しました。実際、サッチャー元首相の経済政策は正解で英国を復活させたのはいうまでもございません。マスコミに煽られて、学会までもが警察のような機関になることは絶対に避けてください。過度な保護はいけません。むしろ科学者の生活がそれほど豊かなものではないことをアピールして欲しいです。でないとも科学者になりたいという若者はどんどん少なくなっていくと思います(実際、医師など実益が得られる職種は人気がありますが、それ以外の科学者は減少傾向です)。何とぞよろしく願いいたします。
※	〇大〇〇研の問題がその後どうなったか知りたいです。